SCOTTISH
Country Dancer

RSCDS 会員向けマガジン日本語版　第 39 号　2024 年 10 月号

39

ＲＳＣＤＳ
埼玉ブランチ
東京ブランチ
東海ブランチ
分担訳

rscds
Tokyo Branch

RSCDS 東京ブランチ

2024 年 12 月

RSCDS の行事

第 95 回 AGM とオータム・ギャザリング 2024
2024 年 11 月 1－3 日　メドウバンク・スポーツ・センター、エジンバラ

サザン・フリング 2024　メルボルン
2024 年 11 月 22-24 日　　メルボルン、オーストラリア

ウインタースクール 2025
2025 年 2 月 16-21 日　　ピトロッホリー、スコットランド

スプリング・フリング 2025　ブライトン
2025 年 4 月 11-13 日　ブライトン ＆ ホーヴ、イングランド

サマースクール 2025
2025 年 7 月 13 日 - 8 月 10 日　伝統的
ユニバシティ・ホール、セント・アンドルーズ

もくじ

RSCDS の行事 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
編集長から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
本部からのニュース ・・・・・・・・・・・・・ 3
チェアおよび各委員長報告 ・・・・・・・・・・ 4
レディ・スーザン・モンゴトメリーとは誰？・・ 7
アバディーンのアラスター・リード ・・・・・ 8
特殊な場所でのダンス ・・・・・・・・・・・・ 12
RSCDS の伝統的ダンス ・・・・・・・・・・・ 13
初期の RSCDS ダンスのアフタヌーン ・・・・ 15
国際ブランチの 20 年 ・・・・・・・・・・・・ 17
世界各地からのニュース ・・・・・・・・・・・ 19
ジョン・パイパー大佐 ・・・・・・・・・・・・ 21
オート・サボワでｽｺｯﾄﾗﾝﾄﾞの音楽とダンス・・・ 23
ウィリアムソン、ダウン・アンダーへ行く・・・ 24
編集長への手紙 ・・・・・・・・・・・・・・・ 25
追悼 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
ダンサーズ・ダイアリー ・・・・・・・・・・・ 28

編集長から（p.3）

SCD における私たちの喜びは、毎週のクラスの楽しみ、地域のイベントでのダンス、重要なお祝いのハイライトとしてバンドを招いてのボールの興奮、そしておそらく何よりも、生涯にわたる友情の喜びにあると思われる。スコットランド文化に重要な貢献をしてきた活動に、幸運にも私たちは関わっている。スコットランドから遠く離れていても文化活動として共有されてきたことを知ることによって、私たちの喜びはもっと深まる。

私たちの組織は、スコットランド文化の保存と促進に積極的な役割を果たしている。地域のクラスを維持し、ダンスを考案し、作曲し、スコティッシュ・カントリー・ダンシングとその歴史を教えるために世界中を旅してきたメンバーの貢献を通して、私たちは私たちの歴史を大切にし、祝福し、分かち合っている。

ソサエティの初期の会員は、資料室、出版物、手書き原稿への利用は制限されていたが、どのように踊られていたかの個人的な記憶、特にイゾベル・スチュアートのメモがあった。現在の私たちは豊富な資料を手にでき、初期の資料の中のいくつかのダンスの復元には疑問があり、その多くは長い間踊られていない。もし初期の会員が、18、19 世紀には ‘down the middle and up’ は 1 組が 2 組の位置で終わり、常にプログレッションするフィギュアだと知っていたら、私たちの伝統はどんなに違っていただろう？続く poussette はどちらかというと ‘waltz’ で 1 周するプーセットだった。

古い踊りの歴史や再現は難解で、学術的研究を好む人にしか興味がないように思われるが、違う風に再現すればこれらの踊りは、もっと楽しいだろうと考える価値がある。

今号には、研究グループ・メンバーのピーター・ナップマンが私たちの伝統的ダンスはどのように‘伝統的’か？という疑問を寄せている。ニュージーランド・ブランチから、ロッド・ダウニーは RSCDS の初期のダンスの調査結果を応用して、地元のダンサーに指導、成功したことを紹介している。

歴史的観点からの記事や、最近の会員の興味深く珍しい活動にスポットを当てた記事もある。アバディーンのアラスター・リードへのインタビューは 1950、60 年代のソサエティとその活動の魅力的な様子を伝えている。さらに、世界中の多くのダンサーが加わっている重要な国際ブランチ（インターナショナル・ブランチ）がある。フィオナ・グラントがこの“最も珍しいブランチ”の 20 年の歴史を紹介している。

編集者に投稿してくれた人ありがとう；みなさんの意見や関心に感謝する。しかし、年 2 回の発行では有意義な討議は困難である。これについては何が代わりになるか、編集チームや役員会と検討したいと思う。

私たちには創造的精神を刺激する、多くの歴史的知識や現代の経験がある。現在を楽しみ、過去に敬意をはらい、探求し、そして未来に向かって着実に前進しよう。

マージョリー・マクラフリン　　編集長、サンディエゴ、カリフォルニア

本部からのニュース（p.4 - 5）

2023―2024 に達成したこと

● 助成金として£14,252 を授与。
● 若手のダンサーやミュージシャンが参加できるように 24 の奨学金を、サマースクール、ウインタースクール、スプリング・フリング参加者に提供
● スコティッシュ・ダンスの教師、ミュージシャンをサポート
● スコットランド国立美術館、スコットランド教育省とパートナーシップを結ぶ
● 健康増進を推進するためのワーキング・グループの立ち上げ
● ダンス・アラウンド・ザ・ワールドの CD 作成

上記以外の活動については、年次報告 2023-2024 を参照のこと

会員数

総会員数：2024 年 3 月末現在で RSCDS 会員数は 9,650 人、昨年の会員数 9,622 から微増した。

ブランチ実績

● 71 のブランチからメンバー数の増加の報告があった。
● 20 のブランチでは昨年とほぼ同人数であった。
● 海外の、特に北米とヨーロッパのブランチでは明らかにメンバー数の増加が見られた。

遺贈、祝賀、トリビュート基金

今年、RSCDS は、ケネス・ホィットル（英国）、ジョイス・ディドンズ（ケンタッキー州、米国）、キャシー・コーソン（ケンタッキー州、米国）、ケン・ブラックウッド（カナダ）、イアン・マクレラン（英国）のご家族や友人から寛大な寄付をいただいた。本部事務所には、大切な人を偲ぶための個人的な場所である追悼録がある。愛する人の思い出、考え、物語を共有し、その人のために寄付をつのることができる。

募金活動

キルトウォーク：185 人のサポーターのおかげで、RSCDS のために 5,000 ポンド以上が集まった。写真（左から）は、ガリー・クール（次期チェア）、ウィリアム・ウィリアムソン（チェア）、リンダ・ウィリアムソン（次期ユース・サービス委員長）、リジー・ベリッジ、セバスチャン・ワンレス（グラスゴー・ブランチ）、ジョン・ベリッジ（RSCDS 主席執行責任者）、そして犬のスコッチ君！

（キルトウォークはスコットランド最大規模の多人数参加のキルト着用ウォーキング・イベントで、多くのスコットランドの慈善団体のために資金を集めている。）

ブランチ賞

ブランチ賞受賞者に祝意を表する。

増本サチ子　　東海ブランチ
西森典子　　東京ブランチ

（そのほかの受賞者は原文参照）

ユニット 5 試験結果

2024 年の新たなティーチャーの皆さんおめでとう
（合格者氏名は原文参照）

アーカイブ（資料庫）

アーカイブはこれまでになく忙しく、多くの新しい所蔵品が追加されている。最近では、LP レコードと 78 回転レコードの両方で、録音音楽が大量に入っている。その結果、アーカイブの録音音楽目録は現在かなり充実しており、1920 年代から、ビニールレコードの生産が衰退し始めた 1970 年代後半/1980 年代までの録音を網羅している。これらの録音を分類、デジタル化し、会員の個人的な利用に供えるというアーカイブ・プロジェクトが現在進行中である。現在のアーカイブの材料としては、これには非常に長い時間がかかる可能性がある。アーカイブ目録には、ジミー・シャンド、アダム・レニー、ジム・キャメロン、マイケル・ダイアク、ウィリアム・ハナ、アニー・スコット・シャンド、ジョージ・デビー、ティム・ライトなど、過去の人気バンドリーダーやミュージシャンによる SCD 音楽の古い 78 回転レコードの所蔵品がリストアップされているが、以上はほんの一例である。

録音および印刷物による音楽 - RSCDS アーカイブ

おそらく最近最も重要で興味深い所蔵品は、「残品整理中」だった会員からの寄付による「ゼンマイ式」HMV 蓄音機である。この蓄音機は HMV 社によって製造されたもので、1920 年代半ばのものであるが、正確なモデルはまだ不明である。状態は非常に良く、完全に動作しており、内蔵されたサウンドボックスのおかげもあって、音質は驚くほど優れている。SoundCloud サウンドクラウド（ベルリンに本拠を置く音声ファイルサービス）の ラジオ、「RSCDS アーカイブからの音」で、ジミー・シャンドのソロ・アコーディオンによる Virginia Reel の演奏（1935 年頃）と、J・マイケル・ダイアク楽団による Strip the Willow の演奏（1923 年頃）を、オリジナルの 78 回転レコードからデジタル化したものが聴ける。アーカイブは要予約制。

インストラクター用のコア・トレーニング（CTI）

2021 年以来、19 名のメンバーが CTI を終了した。
（氏名は原文参照）
プログラムに興味のある方は本部ウェブサイトで。

2024～2025 年役員会および委員会メンバー

役員会

役員会 3 年間の任期を務める 3 人の役員の任命に必要な選挙　1x 次期チェアマン（2 年間）+ チェアマン（2 年間）
次期チェアマン候補者 : セバスチャン・ワンレス（グラスゴー・ブランチ）
役員候補者 : クリストファー・スミス（パースおよびパース州ブランチ）、カルロス・カンディア（国際ブランチ）

会員サービス委員会

選挙が必要（異なる任期の 5 つのポストに 6 人の候補者）
メンバーの任命には選挙は不要 : 2（3 年間）、2（2 年間）、2（1 年間）
候補者:

ベアトリクス・ウェプナー	ウィーン・ブランチ
デボラ・クロスリー	シェフィールド
キャサリン・ホスキン	ニュージーランド
ナイアル・ブートランド	グラスゴー
ポール・マックナイト	アバディーン
スーザン・マクファーディエン	本部

教育訓練委員会

1x 次期委員長（1 年間+委員長として 3 年間）の選挙が必要、3x（3 年間）、1x（2 年間）
次期委員長 : :グレアム・ドナルド　–　本部
候補者:

アビー・ブラウン	ユース・ブランチ
エメリック・フロメル	パリ
デビッド・クィーン	リブル・バレー
ディアドリ・マキッシュ・バーク	トロント
フィオナ・グラント	ブリストル
イアン・スチュアート	ハートフォードシャー&地域

ユース・サービス委員会

選挙は不要　2 名（3 年間）

エンマ・ゼルケ	中央ドイツ・ブランチ
ウィリアム・トムソン	ロンドン

チェアから　　ウィリアム・ウィリアムソン　（p.6）

本部で行われ制作されるものはすべて、会員に利益をもたらすものでなければならない

ダンサー、ミュージシャン、そしてスコットランドの豊かな文化遺産に興味をお持ちのみなさん、この「スコティッシュ・カントリー・ダンサー」誌にようこそ。楽しく興味深く感じていただけることと思う。このすばらしいマガジンを会員のために制作してくれた編集長のマージョリーとそのチームに感謝したい。

私はこの半年間で、熱意、楽しさ、新しいアイデア、そして新しい友情の構築といった多くのすばらしい側面を目にしてきた。どこを訪れても、スコティッシュ・カントリー・ダンシングを地域社会で盛り上げ、私たちが描いている楽しさと包容力を分かち合おうと考えているすばらしい人々に出会った。どのような役割であれ、私たちのソサエティを温かくフレンドリーなものにするために貢献してくれる、すべての会員に感謝したいと思う。これは地元のブランチやグループがあってのことである！初めて訪れる人々が出会う「私たちの成果」とはどのようなものだろうか？

ソサエティの役員会と委員会は、ブランチや個々の会員を支援することに全力を注いでいる。本部で行われ制作されるものはすべて、会員のためにならなければならない。

新しい取り組みとしては、健康戦略ワーキング・グループがある。ガリー・クールが統括するこのグループはソサエティ内の健康専門家たちで構成されており、スコティッシュ・カントリー・ダンシングがもたらす健康効果を広めるために他の団体と連携を図っている。

コミュニケーションの見直しも進行中である。会員とのコミュニケーション手段は以前よりも増えたが、これらの機会をどのように活用するのがベストなのか、見直しが進められている。ソサエティのイベントも評価中である。これらは、本部の役員会とスタッフ、そして会員の間で行われている有効な活動の一例である。こうした活動はともすると目立たないこともあるが、長期的にブランチや会員をサポートするためのものである。

COVID-19 のパンデミックから、私たちは大きな前進を遂げてきた。しかし、今後、私たちのダンシング・コミュニティを築いていくためには、会員すべてが地元のブランチや RSCDS の組織全体と関わっていかなければならない。

どうか地域社会に働きかけ、「一緒に参加して、フロアに立ち、楽しみましょう」と声をかけよう（その難しさは承知しているが）。役員会、委員会、そしてスタッフが皆さんをサポートする用意は万端だ。

さあ！準備はOK！…

ご存知のとおり、ウィリアム・ウィリアムソンは先日入院し心臓手術を受けた。ウィリアムソンとリンダは、一日も早い回復と完治を祈って温かいメッセージを寄せてくれた世界中のダンス仲間に感謝したいと述べている。現在、自宅療養中で、皆さんが思われるように元気なようである！

会員サービス委員会　アンジェラ・ヤング　(p.6)

本部のスタッフと委員会メンバーの専門知識、粘り強さ、努力に心から感謝する

今年初め、委員会は長らくMS（Membership Services 会員サービス委員会）の課題であったメンバーズ・パックを完成させた。様々な遅れは、このパックの目的について議論が交わされたためだった。ー新しいダンサーの獲得、RSCDSの新会員への情報提供、現会員への最新情報、それとも現会員と新会員の両方に役立つものかー　その結果、RSCDSメンバーシップに関する情報（特典、主要情報、簡単な歴史、主要なRSCDSイベント、オンライン・コンテンツへのリンク）を新会員に提供することに重点を置くことが決定された。その内容は広報目的でも活用できるので、新しいダンス年の始まりに合わせてブランチのニーズに応えられることを期待している。これはみなさんのツールなので、欠けている側面があると思われた場合はご連絡を：常に適切な情報を提供することを目指しており、このデジタル・リソースは簡単に更新することができる。各ブランチはメンバーズ・パックを本部のスタッフまでご請求を。

次に、「ダンス・アラウンド・ザ・ワールド」。これはダンサーたちがスコットランドから世界中を巡り、再び戻ってくるというグローバルなダンス・イベントで11月23日（土）に催される。その日にダンスを行うブランチやグループから報告が寄せられているが、目的は、誰でも、どこでも、キッチンや庭、地域のホールで、小さなグループでも大きなグループでも、ダンスを踊り、写真やビデオをできるだけ広く共有することだ！――たとえ1ダンスでも。5月には、うれしいことにコリン・デュワーと彼のスコティッシュ・ダンス・バンドとスタジオに戻りDance Around the World CDを録音した。この新しい録音は、新旧のダンス両方が含まれ、RSCDSのコレクション・リストに加わるすばらしいものだ。10月には、このイベントDATWをサポートするデジタル・ブックレットもリリースされ、情報や手引き、楽譜が無料で提供される。

よく聞かれる質問のひとつに「なぜ新しい録音が必要なのか？」がある。RSCDSは、そのダンスをカバーするブック・ナンバーのCDを録音しているが、それだけで十分ではないのか？今シーズンのロイヤル・アルバート・ホールからのBBCプロムス（7～8月に行われるクラシックの気軽なプロムナード・コンサート）を観ながら、私はこう考えた：マーラーの交響曲第5番の録音が世界に一つしかないとしたらどうだろうか。ビバルディの「四季」の完璧な演奏はひとつだろうか？演奏はそれぞれ異なり、演奏者はニュアンスやテンポ、ダイナミクス、感情、それらを場の雰囲気に応じて変える。スコティッシュ・ダンスは音楽とのつながりが重要で、一つの録音ですべての人が満足するわけではない。さまざまなバンドが異なる感情を引き出し、そして新しい録音には最近作曲された曲も含まれており、これは21世紀において私たちの伝統を生き生きと保つために重要なことである。

今回の私の報告が、委員、次期委員長、そしてMS委員長としての7年間の締めくくりとなる。その間、多くのプロジェクトに携わり、Dance Scottish at Home（オンラインクラス）、フォーメーションとムーブメントのインデックス、Thirty Popular、サー・ウォルター・スコットのThe Heart of Midlothian、Platinum Jubilee、Medal Test Resources、内容が拡張されているBook 53など、リソースの拡充と利用しやすさの向上を目指してきた。

残念ながら、すべての長期的な課題を達成することはできなかったが、時の試練に耐えられるようなRSCDSの財産となるものを作り上げるために努力された皆さんに心からのお礼を述べたい。

本部のスタッフ、そしてMSの旧および新メンバー全員に感謝する。

教育訓練委員会　デブ・リース　(p.7)

何人かの新しい試験官がトレーニングを終了したが、世界中でさらに数を増やすことを検討している

ダンシングでいっぱいの夏が終わりに近づき、世界中からダンサーがセント・アンドルーズのサマースクールに参加している。4週間で530人以上のダンサーと、70人以上の教師とミュージシャンが参加するRSCDSサマースクールは、最終週が終わるとすぐに翌年の計画が始まる。私たちは、2人のスクール・ディレクター、スー・ポーターとフィオナ・マッキー、そして彼女らのチームにとても感謝する。また、RSCDSオフィスのスタッフ、特にモイラ・トムソンに、サマースクールを成功させるために多大な努力を払ったことを感謝する。

ユニット試験はセント・アンドルーズとTACサマースクールの両方で行われ、他の地域では年間さまざまな地元の場所で試験が開催された。試験に合格し、トレーニングの次の段階に進むすべての皆さん、おめでとう。新しい教師を養成する仕事は非常に特別でやりがいがあり、今年はセント・アンドルーズとTACの両方で新しい教師のトレーニングコースを実施し、世界中の動けるチューターの数を増やした。チューター候補は全員、午後3回の実践的なチューター体験を含むトレーニングを完了する前に、2回のオンライン・セッションに参加した。

過去数年間で、何人かの試験官が引退した。私は、その人たちが長年にわたってソサエティに貢献し、世界中のクラスやイベントで、資格のある教師を確保するため行った役割に感謝したいと思う。現在何人かの新しい試験官がトレーニン

グを修了しているが、コストと環境の両方の理由から、移動を最小限に抑えるため、十分な人数を世界中で増やすことを検討している。

ティーチャーの継続的な育成は、委員会の議題の上位にいる。ティーチャー資格またはインストラクター向けコアトレーニング・プログラムの修了は、SCD ティーチャーとしての成長の始まりである。定期的な Teachers Newsletter は、クラスを運営している人なら誰でも興味を持つ記事や情報が掲載されている。The Virtual Teacher Conference は 2 月末に開催され、さらに 1 週間にわたっていろいろなトピックスに関するビデオ・プレゼンテーションが行われる。ウォームアップの小冊子は、ダンサーのウォームアップとクールダウンのエクササイズに関する最近の研究を取り入れ、元の小冊子のアドバイスとガイダンスの一部を更新するため、改訂中である。私たちはこの作業を、数か月間で完了したいと望んでいる。

教育訓練委員会 は、すべてのトレーニングと評価プログラムを維持するため、さまざまなプロジェクトと定期的な継続的な作業で常に忙しくしている。今年も一年を終えるにあたり、退任するメンバーのエリー・ブリスコー、ローナ・バレンタイン、エイリ・ガーデンには、任期中に委員会への計り知れない貴重な貢献をしてくれたことに感謝したいと思う。私は 11 月に新しい委員のメンバーを、彼らのアイデアや観点と共に迎えることを楽しみにしている。

青少年サービス委員会　フィリッパ・マッキー　(p.7)

私はジュニア・サマー・キャンプにおける若いダンサーたちのすばらしい体験を聞くことができ嬉しい

前回の記事を書いたとき以降、私たちはケンブリッジで成功したスプリング・フリングを楽しんだ、私はこのようなすばらしいイベントを作るため、彼らが注いだ仕事の主催者に感謝したいと思う。今年の 11 月、サザン・フリングはオーストラリアのメルボルンで開催され、その成功を願っている。私たちは両イベントに奨学金の助けがあることを大変嬉しく思っている。私たちは、これらのイベントを身近なものにし、ヤングたちがこれらの特別な行事を楽しむ機会を提供することが重要だと理解している。私たちは、将来のスプリング・フリングに情報を提供し、サポートするために、主催者たちの経験を組み込んだガイダンスを継続的に作成している。4 月には、私たちは若者の調査を推進することができ、回答を通して、若いダンサーやミュージシャンが何を重視しているかを理解し、より良いサポートを提供できるようにしている。

私はこの特別なコースの提供を支援し、教え、音楽を提供し、それを可能にしたすべての人の貢献に感謝している。私たちはこのコースが発展を続け、若者が音楽やダンスを学び、体験するための適切な環境を提供し続けることを願っている。今年のサマースクールでは、私はソーシャル・ダンスや伝統音楽の楽しさを改めて思い出した。今年はすばらしい年だったし、そして私たちのクラスがまたジュニア・サマー・キャンプで再開されるとき、私はこの喜びを家に持ち帰ってほしいと願っている。

私たちは、ファミリー・ウィークエンド行事を提供するために仕事を続ける。今年初めに調査に貢献してくださったすべての方々に感謝し、その回答をこれがどのように提供されるかを知らせるために使用する。その目的は、2025 年にスコットランドで最初のイベントに家族が参加する機会を提供することである。どうぞこのニュースに注目していただきたい。

ジュニア会員の受け入れは非常に励みになる。この会員資格は 12 歳未満が対象で、詳しくはウェブサイトを利用していただきたい。若いダンサーの親は、RSCDS のウェブサイトでジュニア会員についてもっと知ることができる。

私たちは本部スタッフのサポートにとても感謝している。私たちは、スタッフの創造力のある貢献、スタッフが提供するサポート、そしてこれらのプロジェクトに費やしてくれた時間をとても幸運に思っている。ソーシャルメディアでユース・サービスの仕事の詳細をマガジン、ブランチメール、Dance Scottish Together で見てほしい。青少年サービス委員会の努力、アイデア、取り組みに感謝している。私は、彼らがリンダ・ウィリアムソンのリーダーシップの下で続けていくことをとても信頼している。私は皆様の幸せを願っている。

青少年サービス委員長としての任期の最後の年を思い起こすと、世界中から若いダンサーやミュージシャンについて多くの好意的な体験を聞くことができ、勇気づけられ励まされた。ヤングを支えるために活動しているブランチに、私の感謝の気持ちを表する。みなさんのストーリーを私たちと共有していただきたい。何がうまくいったかについてのアイデアを共有できれば、他の人も同じことをする助けになるのはすばらしいことである。メールでご連絡を。

レディ・スーザン・モントゴメリーとは誰？ （p.8 - 9）

1997 年、RSCDS は 75 周年記念ブックレットで、40 小節のストラスペイのダンス Lady Susan Montgomery を発表した。デラウェア・バレー・ブランチのジェフリー・セリングは、このダンスを「すばらしい曲調とシンプルだが美しい振り付け」で個人的にとても気に入っていると語っている。この興味深い記事は、レディ・スーザン・モントゴメリーとは誰なのかという彼の好奇心から生まれたものである。

（写真）レディ・スザンナ・モントゴメリー

オリジナルのダンスは、デビッド・ヤングの 1734 年の手書き写本に載っており、タイトルは Lady Susan Montgomery's Hornpipe となっている。曲は 32 小節、3/2 拍子のホーンパイプ（トリプル・ホーンパイプ）である。75 周年記念ブックレットでは、出典としてデビッド・ヤングの 1740 年の手書き写本が誤って記載されている。その手書き写本は、ジャック・マコナヒーの「18 世紀のスコットランドのカントリー ダンス」の多くのダンスの出典でもあるが、このダンスの出典ではない。40 小節の曲やダンスは古いコレクションには登場しないので、テンポと小節数の変更は奇妙である。RSCDS の（以前の）出版・調査委員会は、出版に際してある程度の自由度をもってこのダンスを書き直した。

とはいえ、20 世紀のストラスペイの Lady Susan Montgomery には、ターン、優雅なハンドリング、カバーの機会が満ちている。セッティング、キャスティング、フィギュア・オブ・エイト、ターンが何か気の利いた新しい動きにつながることが多いモダン・ダンスとは異なり、Lady Susan Montgomery は、これらの一つ一つがダンスの中心を形成し、非常に社交的な経験が得られる。私はこれをプログラムに取り入れ、自分のブランチでもワークショップでも何度も教えてきた。いつも好評を博している。私が RSCDS の セント・アンドルーズのサマースクールで、ティーチャーズ・クラスでこれを教えたとき、2 セット 16 人のティーチャーのうち、この曲を以前にやったことがある人は一人もいないだけでなく、多くは聞いたことさえなかった。

最近、2023 年カナダ・エドモントンのウィークエンドで Lady Susan Montgomery を指導する準備をしていたとき、いったい Lady Susan Montgomery とは誰なのかと疑問を持ち始めた。スコットランド・ダンス史の研究者ジミー・ヒルは、彼女はエグリントン伯爵夫人のレディ・スザンナ・モントゴメリーではないかと示唆したが、おそらくダンス Lady Susan Montgomery は、レディ・スザンナの 3 番目の娘、レディ・スーザンを称えるダンスだったと思われる。しかし、そのレディ・スーザンを探すうちに、彼女の注目すべき母親、レディ・スザンナをより深く知ることになった。彼女は知的で教養があり、才能があり、美しさで有名だった。レディ・スザンナの名前は、他の 2 つの有名なダンス The Gentle Shepherd と Up in the Air にも関連している。

家族関係：レディ・スザンナは 1689 年にケネディ一族のアーチボルド「ザ・ウィッキド」とエリザベス・レスリーの娘として生まれた。スコットランド貴族の他の女性たちと同様に、彼女は「女性らしい技」、つまりふるまい方、適切な服装、優雅な身のしぐさについて教育を受けた。また、家庭の運営方法や優雅なもてなしの役目も学んだことだろう。彼女はどちらの役でも秀でていた。

予想通り、レディ・スザンナには多くの求婚者がいたが、そのほとんどに彼女は失望させられた。その中には、ペニクックのジョージ・クラーク卿がいた。私たちは彼の名前が付けられた美しいストラスペイの曲で Up in the Air（Book20）を踊る。スザンナはフルートを演奏したが、18 世紀にはフルートは男性の楽器と考えられていた。彼女を口説くために、ジョージ卿はレディ・スザンナに次のような親密な詩を書き、それをフルートの中に巻き込んで送った。

「私は彼女に自由を譲るから、彼女の心を私の心になびかせてください」

しかし、スザンナの父は、別の相手が現れるのを待つよう主張、その相手は、スザンナより 30 歳も年上だった。1709 年、スザンナは第 9 代エグリントン伯爵アレクサンダー・モントゴメリーの 3 番目の妻になった。伯爵は以前の結婚で男子の跡継ぎがいなかったため、息子を切望していた。当初、スザンナは娘しか産んでいなかった。伯爵は離婚を考えていたが、若い妻は、持参金、若さ、美しさ、処女性を返さない限りは離婚を拒否した（これは、私には非常に現代的なことのように思える！）。幸いにも、息子が生まれたので、離婚には至らなかった。

スザンナは 15 年間で 11 人の子ども（3 人の息子と 8 人の娘）をもうけた。最初の息子であるジェームズ・モントゴメリーは 1724 年に 6 歳で亡くなったが、残りの子どもたちは全員成人した。これは乳児死亡率が高かった時代には驚くべきことである。スザンナは子どもたち全員より長生きした。1729 年に夫のアレクサンダーが亡くなり、彼女は 40 歳で未亡人となった。彼女はその後 51 年間生き、彼女は再婚せず、子どもたちを注意深く思慮深く育て、家族の財産を管理することに人生を捧げた。彼女は私有の炭鉱を監督し、炭鉱労働者との労働争議を鎮めたことで知られている。また、ビール醸造所も設立したが、これはあまり成功しなかった。これらの役割（鉱山管理者、労働争議交渉者、ビール醸造所の所有者） は、当時のどの階級の女性にも一般的ではなかった。また、彼女には奇行もあった

ことが知られている。ペットのネズミを飼っていたことも知られており、そのネズミは命令に従ってやって来て「ダンス」を踊るように訓練されていた。

聡明さと知識：上流階級の女性が、主にその美貌や魅力や男子の跡取りを産むことに価値があるとされた時代に、レディ・スザンナは知性ある資質故にも目立っていた。彼女は博識でフランス語、ドイツ語、イタリア語を話した。彼女は音楽、芸術、文学に関する月並みな女性らしい話題以上の、科学や哲学の領域にもゆとりをもって会話し、詩人で作家のアラン・ラムジイが「神々しく魅力ある優しさと平等な思考を伴った、優れた機知と正しい判断の人。」と彼女を賞賛したほどだった。（ラムジイの羊飼いのコメディ、「温和しい羊飼い」はこの伯爵夫人に捧げられていて、私たちダンサーはスロージグ *Book 17* の *The Gentle Shepherd* によりこの演劇を知っている。

文学についての彼女の興味は、同時代の人から彼女のような社会的身分を持つ人としては非常に変っていると見られていた。スコットランドの歴史家であるウィリアム・フレイザー卿は「彼女の美しさには天賦のさらなる価値ある魅力と偉大な功績が加わっている。」と述べている。サミュエル・ジョンソンは「彼女の態度は堂々とし、作法は教養にあふれ、読書は広範囲に渡り、会話はエレガントだ。快活に満ちた仲間内での賞賛の的になっている。」と断言した。

すばらしき美人：レディ・スザンナは真に魅力的でエレガントな美人として国中で知られていた。彼女とその娘たちは高名な「エグリントン風」な歩き方をするので有名だった。8 人の娘たちはみな美しいことで知られていたが、誰一人母親ほど有名ではなかった。次女のレディ・ヘレンは「誰がお母様に優るというの？40 年経っても 1 日も歳を取っていらっしゃらないわ。」と述べたと言われる。そのことはレディ・スザンナさえ知っていた。「私のような美しさにあなたは対抗できる？」と彼女が娘のレディ・ベティに聞いたことがあった。「あなたの美しさには、私の若さは半分も及びません。」とレディ・ベティは答えた。1730 年、伯爵夫人が国王ジョージ二世の宮廷を訪ねたとき（彼女はジェームズ二世の支持者であるにもかかわらず）、彼は彼女を「私の治世中、最も美しい女性だ」と述べたといわれる。多くの作家は、バンゴウのハミルトンが The *Lovely Eglintoune* に書いているように、レディ・スザンナのすばらしい容貌を賛美した。彼女の肖像画は、彼女の一族の屋敷であるカリーン城に飾られている唯一の女性の絵だが、

（写真）カリーン城

高名なギャビン・ハミルトンによって描かれた。その絵は真に堂々とした、優美な女性を表している。彼女は 180 センチもの身長があった。ロバート・チェンバースは彼女を上品で淡い顔色した「魅惑的な美しさ」をたたえた人と表現した。レディ・スザンナは化粧をしなかったが、若い肌を保つようにと豚の乳で毎日顔を洗った。ロバート・キャンベルは「シャクナゲとバラの花がミルクに浸っているようだ」と彼女の顔を賞賛した。年齢は彼女の容貌をそこなうどころか、濃い目の青さも減じなかった。80 歳になっても、「美しくかっぷくのよい貴婦人」といわれ、驚くべきことに 91 歳まで生きた。

スーザン・モントゴメリー卿夫人への私の探索はこのように終わったが、レディ・スーザンだけでなく、人を引きつけて止まないすばらしい彼女の母、レディ・スザンナにも及んだ。エグリントン伯爵夫人は優雅で、美しく、魅力的で、機知があり、信念を持った人であった。彼女はまた、その階級の多くの女性があまり関心を持たなかった献身的な母親の役割を果たした。女性や男性の問題についての彼女の行動力は彼女を完全に当時の名士とした。今日の男女平等論の基準においてもレディ・スザンナはそれを満たしているだろう。

ジェフリー・セリング　デラウェア・バレー・ブランチ

アバディーンのアラスター・リード　(p.10-12)

アラスター・リードは、現在 80 代で、同世代で最もすぐれたダンサーの一人だった。 RSCDS の最初の終身会員の一人であるアラスターは、会員サービス委員を務めた。また、何度もアバディーン・ブランチ委員を務め、ブランチの元チェアである。ジミー・ヒルとのインタビューで、スコティッシュ・カントリー・ダンシングを披露した初のテレビ番組 The Kilt is My Delight（キルト・イズ・マイ・デライト）で紹介されたクラン・ヘイ・ダンサーズとのダンシングについて語る。彼はスウェーデンを訪問した RSCDS インターナショナル・チームにも所属していた。

（写真：1989 年ブレア城のボール、アラスター・リード、グラスゴーのジョハン・マクリーン、バンクーバーのメリー・マリー）

初めてのスコティッシュ・カントリー・ダンシングの出会いは何ですか？

学校ではありません。私は 14 歳で、青少年クラブにいました。マーガレット・ワイズマンが指導者の一人でした。彼女はまだ 21 歳でしたが、すごく年上だと思ったのです！彼女は自分のカントリー・ダンスのクラスに来るよう私を説得しました。正直なところ、あまり説得の必要はなかったのです！亡くなる日まで、マーガレットは親友でした。彼女はすばらしいダンサーでソサエティに多くの貢献を

しましたが、指導者資格はとりませんでした。私が始めた年に、彼女はアバディーン・フェスティバルに私たちのセットを出場させました。ある審査員はわれわれを酷評しました。彼は、われわれは出場すべきではないほど、ひどかった、と言いました。われわれは、わずか 14 歳でした！その結果、そのチームで続けたのは私だけでした。残りの子どもたちは二度と踊りませんでした。

まさか！審査員の役割のひとつは子供たちを励ますことであって、遠ざけることではありません。

残りの子どもはただ諦めたのです。彼が言うほどひどかったのなら、続ける意味がないと彼らは考えたのです。マーガレットは私をデモンストレーションに押し込み、私はフェスティバルで踊り続けました。私はエジンバラ・フェスティバルで開催された第 1 回カッソンズ・カップに出場したアバディーン・チームに所属していました。もちろんエジンバラ・チームが勝ちました。ミス・ミリガンが審査員だったので、彼女はほかには渡せなかったのでしょう。当然の結果でした。最も大切なのは若者を批判するのでなく励ますことです。マーガレットは私をクラン・ヘイ・ダンサーズに紹介しました。

それはデモンストレーション・チームでしたか？

はい、アバディーン・シャー、ターリフ近くのデルガティ城のジョック・ヘイ大尉が始めたグループでした。そこは、スコットランド女王メアリーが 1562 年のコリヒーの戦いの後、3 夜滞在したので、訪ねてみる価値があります。彼女の寝室を見ることができますよ！　ヘイ大尉は城を復元し、今はクラン・ヘイ・センターとなっています。とにかく、彼はスコットランドの伝統をとても愛し、カントリー・ダンサーにチームへ参加するよう募集していました。偉大なボビー・ワトソンがダンシング担当でした。マーガレット・ワイズマンはそのチームにいて、わたしが参加することをボビーに提案しました。BBC の番組 The Kilt is My Delight にわれわれが招かれて、踊ったのはボビーのおかげです。

（写真：有名なハイランド・ダンサーでありティーチャーのボビー・ワトソン）

それは何年でしたか？

1956 年でした—スコットランドでテレビ放送開始からちょうど 4 年。1958 年から 1968 年まで、BBC が毎週放送していた番組 The White Heather Club（ザ・ホワイト・ヘザー・クラブ）の名前を知っている人は多いでしょう。The Kilt is My Delight は 2 年早く始まったので、スコティッシュ・カントリー・ダンシングを取り上げた最初のテレビ番組でした。それは毎週ではありませんでした。1956 年から 1963 年まで続きました。それはスコティッシュ・カントリー・ダンシングの普及に多大な貢献をしました。数年は 4-5 番組だけでしたが、1960 年には 10 番組となりました。それは The White Heather Club より格調高いものでした。典型的なプログラムは、カントリー・ダンシング、ハイランド・ダンシング、スコットランドやゲールの歌、多分スコットランドの詩、そして常にバンド演奏がありました。バンドは、ジミー・シャンド、ジム・マクラウド、ティム・ライト、イアン・パウリーなど、その時代のすばらしいバンドでした。歌手はとても有名なスコットランドの歌手、ケネス・マッケラー、モイラ・アンダーソン、ロビン・ホール、ジミー・マグレガー、Mod モウド（ハイランド人が毎年開くケルトの詩歌音楽祭）・メダリストのケナ・キャンベルでした。ボビー・ワトソンとクラン・ヘイはレギュラーでした。グラスゴーやエジンバラ・ブランチのチームの番組もあれば、ジャッキー・ジョンストンが率いるダンフリーズ・ブランチのデモンストレーション・チームの番組もありました。番組はすべて生放送で、もちろん白黒でした。いくつかの番組はグラスゴーの BBC スタジオからで、ほかにはホープタウン・ハウスのボールルーム、グラスゴーのシティーホール、ケルビン・ホール、ピトロッホリー・フェスティバル・シアターからのもありました。一つはファイビー城から放映されました。それはとても時間がかかりましたよ！朝スタジオに来て、番組が生放送される前、丸一日をついやしました。われわれはアマチュアなので、お金は支払われませんが、経費をもらい、ホテルに泊めてもらいました。

番組で何を踊ったか覚えていますか？

このようなことは以前にはなかったことを覚えていてください。われわれは舞台でスコティッシュ・カントリー・ダンスを披露した最初のダンサーでした。ボビーの奥さん、メイビス・ワトソンはロンドンの舞台に出ているプロのダンサーでした。私は彼女が言ったことを決して忘れません。「ひとびとがフロアに出て、デモンストレーションでダンスを 8 回踊ることほど、退屈なものはないわ！誰かがミドルをダウンしてアップするのを見れば十分。」　彼女はクラン・ヘイ・ダンサーズに大きな影響力をもっていました。彼女はわれわれの公演が面白くなるよう徹底していました。われわれは、一つの公演に違うダンスを組み合わせた最初のチームでした。

The White Heather Club はそんなことしなかったですよね?

はい、まるでソーシャル・ダンスのように踊りました。メイビスは、今では一般的なデモンストレーションを考案した人です。もしあなたが舞台でスコティッシュ・カントリー・ダンシングをしようとするなら、単純に同じダンスを 8 回踊ることはできません。

ソサエティの反応はいかがでしたか？

ジーン・ミリガンがどう思っていたかは知りませんが、アバディーンの何人かのひとびとは、ソーシャル・ダンシングではないという理由で、酷評しました。しかし、もしみなさんが踊りを演じているなら、それは社交ではありません。The White Heather Club では男性はハードシューズ、女性はハイヒールを履いていましたが、われわれはパンプス（ダンス用の靴）で踊りました。The Kilt is My Delight は、とても豪華で、さらに品格があったと言えるかもしれません。司会者は、立派な男爵邸大広間のセットの燃えさかる暖炉のそばでアームチェアーに座っていたのです。われわれはいつも正式なハイランド・ドレスを着ました。主力の呼び物はボビー・ワトソンでした。彼はスウォード・ダンス（剣舞）の Seann Truibhas や The Earl of Errol を踊りました。

（写真：フランスへ向けてアバディーン鉄道駅でのクラン・ヘイ。中央後方アラスター、左にバンドマスターの若きアラスター・ウッド）

ハイランドはやったことありませんね？

そう、少しも魅力を感じませんでした。今でも、競技をしている男の子はめったに見かけず、ほとんどが若い女の子でしょ。私はいつもアバディーン・ゲームズに行くのが好きですが、ハイランド競技会では男の子はひとり、女の子たちが大勢いるのを目にしますよ。女王陛下がバルモラルに滞在しているシーズンは、私はアボイン・ボールやダンサイド・ボールに行ったものです。スコティッシュ・カントリー・ダンシングですが、RSCDS と同じではありません。みなハードシューズです。大丈夫、すり足で踊ることが多いけど、いつも適切なタイミングで手をとり、適切なタイミングで正しい場所にいました。どのようにして、たどり着くのかは別の問題です！代表的なプログラムは The Dushing White Sergeant から始まりました。フォックストロットやワルツを織り交ぜながら The Duke of Perth、The Foursome Reel が後に続く The Eightsome Reel 、Duke of Duchess of Edinburgh、 Hamilton House、The Reel of 51st Division、Scottish Reform、Speed the Plough などがありました。セットは崩れませんでした。とても楽しかったです。ボールは 9 時くらいから始まり、明け方 3 時まで続き、朝食で終えたものです。

クラン・ヘイ・ダンサーズはいつまで続きましたか？

1955 年に設立されて最後の公演は 1964 年でした。約 13－14 人いて、毎週練習のため会っていました。テレビ出演だけでなく、さまざまなショーやコンサートに参加し、エジンバラのアッシャー・ホールで 2 回やりました。こうした知名度の高いイベントとは別に、アバディーン地域の慈善団体や老人ホームで披露しました。グループは、やがて、ダンサーが結婚し、子どもができ、自然に解散しました。われわれは全員、アバディーン・ブランチの会員でしたので、ほとんどがダンシングを続けました。

クラン・ヘイでのハイライトは何でしたか？

それは、間違いなく、1959 年夏の 16 日間のフランスへの旅でした。このようなことは、それ以来一度もありません。

すばらしい経験でした。ブリティッシュ・カウンシル（英国文化交流機関）が、パリの英国大使館やフランスースコットランド（フランコーエコッセ）協会とで、この旅を企画しました。われわれは列車でロンドンに行き、ヒースロー空港からオルリー空港へ飛びました。往復 14 ポンドでしたよ！　われわれは、アゼ・ル・リドー、トゥール、パリ（3 イベント）、ビシィ、ノアン・エ・ベリ、イスーダン、ブールジュ、カーン、ドービル（2 イベント）、ブロイと公演をしました。旅費、宿泊費、食事代をすべて負担してもらいました。そして公演がないときは、たくさんの観光を手配してもらいました。パリの英国大使館で、グラッドウィン・ジェブ大使夫妻はガーデンパーティを開いてくれました。ジェブは、一等書記官に任命される前は、国連事務総長代行を務めていました。のちに彼はリベラルになりましたが、理由を尋ねたら、有名な返答をしました。「リベラルは将軍を持たない政党であり、私は政党を持たない将軍である。」

一番忘れられないイベントは、パリのウィスキー輸入業者協会主催のエッフェル塔の第二展台での歓迎会でした。かなり強い風の中、われわれのデモンストレーションで締めくくりました。パリにいたとき、メイビス・ワトソンと私は、スコットランド国教会牧師のドナルド・カスキー師と昼食をともにしました。彼は、彼が書いた本、The Tartan Pimpernel のサイン本を、私にくれました。それは、彼がナチスに捕まり投獄される前に、約 500 人の連合軍兵士の英国への脱出を手助けした、彼の戦争中の活躍の物語です。

どんな公演だったか覚えていますか？

そうですとも、わたしは、すべてのプログラム、メニュー、チケット、広告、そしてフランスの新聞の報道記録を持っています。どこに行っても王族のようにもてなされました。ロワール渓谷にあるアゼ・ル・リドー城で、われわれは Gay Gordons、Scottish Reform を踊りました。アン・マクリーンのマウスミュージック（伝統的な歌唱音楽）で The Ribbon Threesome、それに The Duchess of Normandy と Rouken Glen、Axum Reel、Hamilton House が後に続き、Double Foursome で締めくくりました。アン・マクリーンは Loch　Lomond と Comin′Thro′ the Rye を歌い、ボビー・ワトソンはスウォード・ダンスを踊り、アラスター・ハンター・トリオが演奏しました。パイパーも一緒で、本当にスコットランド文化の陳列箱でした。べつの場所で、

Macdonald of Sleat、The Fivesome Reel、The Double Foursome Reel を踊りました。われわれは Highland Schottische を踊りあかしたものです。ほかに、The Gay Gordons、 The Bumpkin、 The Ship of Grace、 The Threesome Reel、The New Scotland Strathspey、The Reel of the 51st です。考えてみてください、1959 年は終戦から 14 年しかたっていません。このような文化的訪問は、海外旅行が当たり前になった今日よりずっと重要でした。

（写真:オルリー空港に到着したパイパーと 4 人のクラン・ヘイ・ダンサー）
（写真：フランスのノアンを訪れたアラスターとチーム）

若い頃、アバディーン・ブランチのティーチャーはどなたでしたか？

リリー・ハンターとマーガレット・アンダーソンです。2 人とも、エジンバラに移転する前、アバディーンにあったダンファームリン大学の教師でした。そしてアーチー・パターソン。その後、レスリー・マーティンとジーン・イェーツが来ました。

あなたはまた、ソサエティで海外も行きましたね。

そうです、インターナショナル・チームの一員としてストックホルムに行きました。グラスゴー出身の数少ないダンサーも含んだチームで、アラスター・マクファディエンが訓練しました。

（写真：スウェーデンで Foursome を踊るアラスター）

あなたはジーン・ミリガンに会ったことがあるのでしょうね。

ああ、そうなんです！私がプレリミナリー試験を受けたとき、彼女に、あなたは絶対にティーチャーになれないと言われました。私に手紙をくれたのですが、それには「リードさん、あなたのダンシングは誰よりもすばらしい、けれどあなたは決してティーチャーにはなれないでしょう」と書いてあったことを私は絶対に忘れません。それでやる気が急になくなったのです！今ではそういうことは絶対許されないでしょう。彼女は、以前は試験のための訓練を受けたことがない人にも指導資格を与えていました。こうして私は教えることを断念しました。友人のジョハン・マクリーンは、私に続けるべきだと言いましたが、やめました。ジーン・ミリガンは多くの人にダンシングを広めたけれど、私の若いころには何もやることがありませんでした。戦後、みんなお金がなかったし、テレビもない時代で、夕方のカントリー・ダンシングの集いに出かけることは安上がりな過ごし方だったのです。会場のホールはあらゆる年代の踊る人たちであふれていました。アバディーンのジェネラル・クラスに行くと、ホールには 8～10 セットあって満員でした。今それくらいの人数がいるのはケイリーダンス・クラスだけです。

そんなに大勢のクラスだと感じがちがうのでしょうね。

はい、もちろんです。もっと社交的で、次から次へとダンスが続きました。デモンストレーション・クラスでなければ、テクニックについてあまり強調されませんでした。ジェネラル・クラスでは社交的に踊るだけです。ほとんどのダンサーは、冬の間中少しでも運動ができて楽しく交流ができる夜を過ごすために来ていたので、デモンストレーションには興味がなかったのです。

サマースクールに初めて参加したのはいつですか？

1964 年、20 代のころでした。ワクワクしてとても楽しかったのを覚えています。友人のフランシス・ゴードンが行くように勧めてくれました。彼女はのちにソサエティのアーキビストになりました。私はそのころからずっと参加しています。1967 年にミス・フローレンス・アダムスが教える若い人向けの特別クラスに入りましたが、すばらしいクラスでした。ミス・アダムスがミス・ミリガンに、ヤンガーホールで私たちがデモンストレーションをすることを提案したのです。それまでデモンストレーションはティーチャーがするものでした。それで、ミス・ミリガンはクラスを見に来て提案に同意しました。ヤングダンサーのチームが踊ったのはそれが最初の年で、ティーチャーたちはまったく気にくわなかったのです。そのチームには、アレックス＆ケイト・グレイ夫妻、ジーン・マーティン、ビル・ゾベル、エルギンから来たゲイリー・マッキントッシュがいました。最後にヤンガーホールでデモンストレーションをしたのはーあなたもチームの一員だったから覚えているでしょうーMrs Milne of Kinneff が出た年（1997 年）でした。

（写真：左から 2 人目アラスター、後列右から 2 人目ジェニファー・ウィルソン）

好きなミュージシャンは誰ですか？

アバディーンではアニー・シャンド・スコットが演奏していました。彼女は場を奮い立たせることができます。夜の集まりも終わりに近づきダンサーたちが疲れ始めたころ、みんなを元気づける音楽を演奏してくれます。彼女は会場を見渡して、自分に言い聞かせるーもっと盛り上げるのは今だ！彼女が演奏すると、姿勢がよくなり、足も軽く踊れるようになります。ジェニファー・ウィルソンも同じく最高でした。グラスゴーのミュリエル・モアもすばらしく、彼女たちは、ダンサーの動きに合わせてくれます。今のほとんどのミュージシャンもとてもいいと思うけれど、アニー・シャンド・スコットは格別でした。

あなたはライフメンバー（終身会員）ですよね？

はい、1950 年代中頃、ソサエティはお金を必要としていました。それまではソサエティはボランティアのセクレタ

リの自宅を事務局として使わせてもらっていました。専任のセクレタリを雇うとき、本拠地が必要になったのです。コーツ・クレセント12番地（本部事務所）は1955年に購入され、購入費用を集めるために終身会員制度が始まりました。4,010ポンドで購入後改装されて、最終的には6,005ポンドになりました。そしてもちろん今では20,000ポンド以上の価値があり、とてもよい結果で終身会員のおかげだと思っています。それが年に2度マガジンを受け取り続けるのが嬉しい理由です。現在のメンバーのほとんどは、終身会員が資金を出して本部事務所を買ったことを知らないでしょう。その中の一部の人たちはもう踊れなくなっているとしても、私たちはマガジンを通してソサエティとつながっていたいのです。マガジンが電子版だけになるとしたら、間違いなくメンバーが減少するでしょう。マガジンが届いて初めから終わりまで読み通すことが本当に好きなのです。私はいつも後ろから始めます－誰が亡くなったのかを知るために！マガジンはソサエティで何が起きているかを知ることができるたった一つの手段なのです。

カントリー・ダンシングの将来はどうなると思いますか？

そうですね、スコットランドの国内に力を集中することが必要だと思います。特に学校です。みんなが学校でカントリー・ダンシングを学んだ場合、卒業したあともずっと続けてソサエティに加入することはないかもしれないけれど、ある程度は残るでしょう。

どうすれば学校で取り入れてもらえるかがわかりません。昔に比べるととても難しくなっています。

教師を養成する大学に働きかけることが必要です。かつては体育教師の訓練の一部でしたが、今はそうではありません。そして、何らかの方法でこれは少女たちだけのものではないのだと、少年たちを説得しなくてはなりません。キルトは必要ないのです。その答えは見つけられませんが、ここと同じようにカントリー・ダンシングが文化の一部であるとうい国はほかにはないのです。ここアバディーンでは、シエラ・ベインが教えるケイリーダンスのクラスはとてもうまくいっています。普通スコットランド人ならだれでもDashing White Sergeant は知っていてもThe Reel of the 51st Division は聞いたことがありません。私たちはあまりにも多くの新しいダンスを発表しすぎています。それは経験豊富なダンサーにはいいけれど、新人を増やしてはくれません。ジョン・ドゥルーリはとてもいい友人でした。私のために2つ、ダンスを作ってくれました。ストラスペイのThe Flower of the Quern とジグのThe Miller of Clattです。クラットはアルフォードとハントリーの間にある小さな村で、私の祖父は製粉業者でした。ジョンはとてもすばらしいダンスを数多く作りましたが多すぎます。私は、彼の新しいダンスを試しに踊るグループにいました。彼のより複雑なダンスを踊っているとき、こんなことがありました。女性が男性役をやっていたのですが、こう言わずにはいられなかったのです。「止めてくれ、ジョン！私は男性と踊っているのか女性と踊っているのかわからない」　結局男性役と踊っていたのがわかったけれど、私は彼にこのダンスは考え直すべきだ！と言いました。今では受け入れられているけれど、当時はそうではありませんでした。今はダンスがたくさんありすぎます。

最後の質問－お気に入りのダンスは何ですか？

Red Houseです。子供の頃、初めてのフェスティバルで踊って優勝したのですが、それ以来ずっと好きです。すばらしい旋律で単純なダンスです。本当に踊れるダンスが私は好きなのですが、これはそういうダンスです。

特別な場所でのダンシング　(p.14)

カントリー・ダンスはその名前をスコットランドや世界各国の地名からとっているものが多い。数年前、あるダンサーのグループが、そういう有名で、ときには難しい場所で踊ることを決めた。ダンディのジョン・パルフリーマンがこの挑戦的なグループの誕生と成功を語る。　（ブランチレターNo. 124、p.11参照）

15年前、25人の熱心なスコティッシュ・カントリー・ダンサーが、スコットランドを象徴する山のひとつであるシハリオン山へダンシングの遠征をおこなった。その後、このちょっとした楽しみがグループをスコットランド周辺の珍しい場所で踊るきっかけとなった。なぜシハリオン山だったのか、そしてダンサーたちが国中のいろいろな場所で踊ることに興味を覚えたのはなぜか？その答えは「エクストリーム・ロケーション・ダンシング－厳しい場所でのダンシング」簡単に言えば「ロケーション・ダンシング－その場所でのダンシング」である。

（写真：上左 シハリオン山で踊る　上右 シハリオン山でパイプ演奏　下 シハリオン山に登る）

そのころ、パースシャーやアンガス、ファイフから来て毎週ダンディ市で練習をしていたダンサーたちがSchiehallion を習った。私たちのグループは、ダンスのインストラクターであるロデリック・スチュワートが率いるフリゲート艦のユニコーン号のダンス・グループから発展したグループだった。同じころ、ダンサーの1人がマンロー（標高約3000フィート以上の高い山々の総称）に登りたいという衝動に駆られた。マンローであればどれでもよか

った。友人2人が、シハリオン山はどうかと提案し、それに決めた。もうおわかりだと思うが、この山を下る途中で3人はシハリオン山でSchiehallionを踊るというアイデアを思いついたのである。彼らは踊れそうな場所を数か所見つけた。そこは緑が広がる平坦な場所ではないが、少なくとも広い岩場があった。このアイデアが気に入ったかどうか尋ねられたとき、グループのほかのメンバーは「なぜ？」と聞いたが、すぐに「どうやって？」「いつ？」という質問に変わった。

いくつか問題があった。第1に、グループのほとんどが50歳代後半から60歳代前半で、一度も山登りをしたことがない人がいたことである。毎週のダンシング・クラスが、適度な体力を維持する唯一の方法だった。第2に2009年当時、音響機器は携帯電話とブルートゥースでつながった小さなスピーカーだけで構成されるものではなかった。第3は、Schiehallionは複雑なダンスで、典型的なスコットランドの初夏の気候の中、登山靴とアノラックで踊ろうという考えは、かなり野心的、無謀で心臓に負担がかかるのではないか；みんなの選択次第だった。

しかし、小さな困難は私たちの邪魔にはならず、歩く訓練がその夏から9月中頃にかけて企画され、自信がついてきた。そして、ある晴れた日曜日の朝、山のふもとのブレイズ・オブ・フォス駐車場に集合し、簡単な説明会のあと、山に登った。CDプレーヤーとアンプ、スピーカーを2個、デジタルカメラ、車のバッテリー、そして、それらがうまくいかなかったときのためにバグパイプのセットを持って行った。

天気はよさそうだった。ブレイズ・オブ・フォスではほとんど風がなく、はるか遠くのシハリオン山の頂上に少し霧が見えるだけで、空は青かった。数時間後、山の頂上から1000フィート下の小さな草原で、お楽しみが始まった。まず、だれか体調が悪くなっていないか、高山病はよくあることだし、足首をひねったりしていないかなど、易しいダンスで確かめた。大丈夫、すべてが順調で頂上に向けて出発した。

頂上で2人のパイパーがグループにセレナーデを演奏すると、ハング・グライダーが空を舞い、霧が晴れてきた。景色はとてもすばらしく、その瞬間を心ゆくまで楽しんだ。スコットランドは最高にロマンチックで美しく、私たちのグループは頂上まで登った。それまでに、私たちはシハリオン山の頂上の岩場で踊るのは不可能だと気づいていた。下山を始め、頂上から数百フィート下で再び踊った。エクストリーム・ロケーション・ダンシング（ELD）はこうして生まれた。

山を下りながら、私たちはELDとそれよりも危険の少ないロケーション・ダンシング（LD）、場所の名前のついたダンスをその場所で踊ることの意味について冗談を言い始めた。アイデアはどんどん湧いてきた。

The Wind on Loch Fyne, Culla Bay, Polharrow Burn, The Duke of Perth, The Bees of Maggieknockater それほど挑戦的ではないと思うが、The Corrievreckan（ジュラ島の北の海にある有名な渦潮から名付けられた）。数年前、私たちは小さな船で海に出て、その場でThe Corrievreckanを踊った。驚くべきことに、シハリオン山から15年後のこれを書いている今までに、グループはスコットランド全土で150ダンスを踊った。一部のグループはあえて遠くへ出かけ、イェテボリでGothenburg's Welcome、ミラノでThe Streets of Milanを踊った。一番遠かったのはパースで踊った、Duke of Perth と Australian Ladies…オーストラリアだった！

この冒険の一部は、ここから見ることができる：https://youtu.be//7zo3aP55ols

私たちの次の挑戦は、また別の話である。

RSCDSの伝統的ダンス　（p.15-16）

RSCDSの研究グループは、最も初期のブックに掲載されているダンスの分析を行っている。引用された資料が正確かどうか、またその復元が18 - 19世紀には一般的であったと現在認識しているものと合致しているかどうかを究明するためである。グループの一員であるピーター・ナップマンが、その結果の一部と今後たどる足どりについて語っている。

伝統的ダンスとは？

「過去にこだわる者は片目が見えない。しかし、過去を無視する者は両目が見えない。」これはアレクサンドル・ソルジェニーツィンによる有名な格言である。自分たちの伝統的ダンスに十分な注意を払わなければ、RSCDSには両目が見えなくなる危険性があるのだろうか？

そもそも過去とは何を意味するのだろうか。1923年？あるいは1723年？この記事はソサエティの初期とそれ以前の世紀のダンスとの関連について述べたものである。

ソサエティの初期には、伝統的ダンスのみに重点が置かれていた。1924年から1986年に至るまでRSCDSは500近くのダンスを出版し、45ダンスを除くすべてが伝統的ダンスであると主張されている。中には出典が明記されているものもあるが、多くはそうではない。出典が記されているものであっても、その内容はしばしば曖昧で詳細がともなわず、時には不正確である。ではこれらのダンスはどこ

から来ているのか？RSCDS の復元はどの程度正確なのか？伝統的ダンスはどの程度伝統的なのか？それは重要なのだろうか？そのとおり！私たちの伝統的ダンスの起源と出典は、あらゆるメンバーの関心事であるのは当然のことである。

研究グループが取り組んできた課題は、ソサエティが出版した伝統的ダンスのできるだけ多くについて、正確な出典をはっきりさせるという試みである。これはかなりの難題ではあるが、インターネットの出現以前と比べれば今日では容易なことだ。歴史的資料の多くがデジタル化され、より入手しやすくなっているのであるから。

これは興味深く、発見の多い作業であった。またソサエティの創設者たちが歴史的コレクションを探し出すことに、どれほど献身的であったかを示すものでもあった。特にミセス・スチュワートは、幅広い情報源から集めた、歴史的ダンスの非常に詳細で正確なコピーをノートに残した。アイオン・ジェイムソンやジョン・ダシーなど、ダンス収集やスコットランドにおけるダンスの情報で一目置かれていたほかの知識人たちからもダンスが提供された。

おそらくこの作業で最も残念な点は、このような作業に取り掛からなければならなかったことである。ある団体は、スコットランドの伝統的ダンスを奨励し、「現在定められている踊り方の説明は、調査によって明らかにされた各ダンスの本来の正しい踊り方であるべき」と主張している。その調査の注釈には細心の注意が払われていることが期待されていたはずである。残念ながら、これは事実とばかりは限らないし、誤った思い込みでもある。歴史的ダンスには不確かな部分があるのは避けがたいことである。300 年前のかなり大雑把な解説をどう解釈するのか？いくつかの用語は、いったい何を意味するのか？300 年前に人々はどのように踊っていたのか？

私たちは何を発見したのか？

現在までに 300 以上のダンスを特定し、その出典を精査した。伝統的ダンスの少なくとも 3 分の 2 については、現代の復元作成に使われた原典を現在でも見ることが出来ると言える。これには膨大な量の興味をそそられる作業を要したが、いまだ欠落がありそれを埋める努力を続けている。

名称の変更

ひとつ明らかになったことは、一部のダンスには歴史的出典とは異なる名称がつけられていることである。時にはその違いは小さく、歴史的出典のスペルミスの可能性を修正すれば理解ができる。*Maxwell's Rant* は 1756 年にラザフォードによって *Maxwill's Rant* として出版された。いくつかの名称の違いは、出典を明らかにすることをかなり困難にしている。ソサエティによる歴史的記述が欠けているので、名称が変更されたダンスの出典をあきらかにすることは至難の業である。現在までにおよそ 20 ダンスを確認したが、まだいくつかあるのではないかと思う。

私たちの伝統的ダンスはどの程度伝統的なのか？

これは興味深い質問であるが、明解には答えられないもののひとつだ。初期のブックに掲載されていたダンスの多くは、19 世紀の社交ダンス指導書から収集または取り入れたものである。これらは全体的に解釈しやすく、RSCDS 版と原典とを関連付けることは容易である。しかし 19 世紀のカントリー・ダンスについては、状況に照らし合わせる必要がある。この時代のダンス・プログラムにはカントリー・ダンスだけでなく、カドリール、カップル・ダンス、スコッチ・リールなどさまざまなダンスも含まれていた。より難易度の高い当時のほかのダンスに比べて、カントリー・ダンスは軽い息抜きと考えられていた。

ソサエティは収集されたダンス資料に頼るだけでなく、18 世紀と 19 世紀初期のダンス・ブックも調査した。ジョン・プレイフォードが *The Dancing Master* の初版を出版した 1651 年から、トーマス・ウィルソンが *A Comparison to the Ballroom* の第 4 版を出版した 1820 年までの間に、300 を超えるカントリー・ダンス・ブックが出版された。ミセス・スチュワート、ミス・ミリガン、そのほかの人たちは、これらのブックのコピーを探したと思われる。多くはロンドンで出版され、図書館や個人が所蔵していたものの中から、ソサエティが出版するのに適したダンスを特定するためである。

カントリー・ダンス・ブックと並行して、多くのダンス・ティーチャーやダンサーは自分たちが慣れ親しんでいるダンスの手書き写本を作成した。これらの最初期のものは 18 世紀前半にさかのぼり、スコットランドで記されたり出版されたりしたカントリー・ダンスの最古の資料である。それはどのダンスがスコットランドで踊られていたかを知るには重要な見抜く力を与えてくれる。ソサエティは数々の伝統的ダンスをこれらの手書き写本から手に入れた。

復元

歴史的ダンスの復元は、あくまで復元に過ぎないことを心得ていなければならない。その意図は文字に書かれた初期ダンスの踊り方を解釈し、現代のダンサーが興味を抱くダンスを生み出すことにある。多くの場合、複数の解釈が可能である。RSCDS の多くの復元は原典に忠実であるが、一方には勝手な想像で記述したとしか言いようのないものも含まれている。想像的復元は本質的には悪いことではないが、どのように復元に至ったかについては、常に隠し立てせず正直であるべきである。残念ながら、過去においては公表された一部のダンスの解説に、ソサエティがどのようにして至ったかを説明して来なかった。これは私たちにとって損失であったと思う。

復元の正確さ

伝統的ダンスを踊るとき、それが昔の人たちの踊り方にどれだけ近いかが気にならないだろうか。テンポが変えられていたり、フォーメーションが微調整されていたりしている可能性を知りながら、伝統的ダンスを踊っている。そうではないだろうか？それは私たちの多くのダンスに当てはまることかもしれないが、伝統的ダンスのすべてにでは決してない。ソサエティは以前にはストラススペイではなかったものをストラススペイで出版したり、ダンスからフォーメーションを除いたり、他のダンスにフォーメーションを加えたり、リールをジグに、ジグをリールに、そしてジグとリールの両方をストラススペイに変えたりしてきた。驚くほど数多くの歴史的ダンスが本来は 9/8 のジグで踊られていたのであろうが、今はそうではない。若干の明らかな例外を除いて、3/4 テンポの RSCDS のダンスは珍しい。

歴史的ダンスはしばしばチューンとダンスの間に強い関係がある。現代的な解釈によりダンスの長さを変えると、この関係は失われてしまう。ソサエティは長さが歴史的資料と異なるダンスを数多く出版して来た。32 小節が 40 小節に、64 小節が 48 小節あるいは時に 40 小節になるなど。こうした RSCDS の改作のすべてが成功した訳ではない。

今後の計画

この研究に着手した理由のひとつは、RSCDS が出版している伝統的ダンスの多くがプログラムには登場しないということに気づいたからだった。何故だろうか？理由はたくさんある。たとえば易しすぎる、似かよっている、現代のダンサーには興味がない、あるいは馴染みがなかったり、こなし難いフォーメーションが含まれているなどなど。私たちが自らに課した課題のひとつは次のようなものだった。これら「踊られていない伝統的ダンス」の一部を見直し、今日のスコティッシュ・カントリー・ダンサーにとってより魅力的な別の復元が可能かどうかを確認することだ。

伝統的ダンスの解釈に関する記事の中で、ソサエティが出版している伝統的ダンスの多くが色あせない手法で復元され、古典となっていることを認めないのはうかつなことだろう。

最終的見解

ソサエティは自らに先見性があり、生きた伝統であることを誇りとしている。新しいフォーメーションを用いてダンスを考案することは、この 40 年ほどのひとつの特質であった。しかし、前だけを見て過去をないがしろにしていれば、孤立し深みのない存在になるかもしれない。原資料を直接理解し解釈しようとすることで古いダンスを探求すれば、啓発的な経験となり得る。そうすることで、よく知っているフォーメーションやその音楽との関係に、新たな光を当てることができる。過去を振り返り理解することは、新しい伝統を創り出すのと同じくらい重要なことである。

画像：伝統的資料

Glasgow Lassies - Walsh Cal CD Vol II part I (1748) – NLS
Green Grow the Rashes - Johnson Cal CD 1750 John Black's Daughter – IMSLP
Mrs MacLeod - The Ballroom - 1827 RSCDS
Jessie's Hornpipe - YS1-9 – RSCDS
Miss Cahoon's Reel - Bremner - NLS

初期の RSCDS ダンスのアフタヌーン：Book 1 の出版 100 年を祝う （p.17-18）

ニュージーランド、ウェリントンのティーチャーでダンサーのロッド・ダウニーは 2024 年 4 月に開催されたその午後の会で楽しみをわかちあった。そのイベントについての更なる情報は https://wellingtonscd.org.nz/で入手可能。

2023 年にウェリントン RSCDS 地域委員会は 2024 年にソサエティ 100 周年を祝うために初期のウェリントン地域ダンスのプログラムを計画し、同じ精神の初期の RSCDS ダンスを検討する研修会を開催することにした。1924 年にソサエティの Book 1 が刊行されたので、その出版物は 2024 年で 100 年になる。

委員会は 1930 年以前に出版された Book 1－5 から初期のダンスを選ぶことを決めた。Book 1 だけの午後の集いにはストラスペイはなくフォーメーションが非常に限られていたので、私たちは広範囲に歴史的 RSCDS ダンスを含むようにした。私はそれらの古いダンスが好きなので、そのイベントの仕事を率先して進めた。

人々が初期の Book で何をしたかを理解し、今日どれだけポピュラーになっているかを知ることに興味を覚える。

Book 1－5 には 60 のダンスが入っている。この 60 のダンスのうち、私は面白さと踊りやすさに基づき 13 ダンスを選択した。午後にはその中から 10 ダンスをグループが踊った。私は少なくとも Book 1－5 のそれぞれから 1 ダンスを取りあげた。ともかく私たちが普通に踊っているダンスの大部分は避けたかった。だから、*Petronella* や *Flowers of Edinburgh* などはない。その上私は初期の Book の中で簡単ではない種々のフォーメーションを残すようにした。例えば、Book 1 で 12 ダンス中の 7 ダンスはプーセットで終わる。いつ変わってしまったのか！ここ数年間、中央をダウン、アップしてからのプーセットは、多くのダンスでそうすることをみなさんは知っている！最近のダンサーた

ちは、プーセットで終わるダンスの多いプログラムを好むのだろうか？

まるで体操の練習と思われる、踊るのが難しいダンスは取り上げなかった。除外したダンスの中には、*Saint Patrick's Day* と同じようなダンス、*The Falkland Beauty* も含んでいるが、これらはおそらく誤って復元されたと思われる。一方では似たような要素を持つが、あまりなじみのないダンスを選んだ。例えば、*Strip the Willow* の代わりにランニング・ステップのあるダンス、*The Haymakers* を取り入れた。*Glasgow Highlanders* の代わりには珍しい類似の開始位置で始まり、あまり踊られていない *Lady Macintosh's Rant* を選んだ。しかし、*Lady Macintosh's Rant* では'デュプル・マイナー'より'トリプル・マイナー'で踊られた。（編集長注：イングリッシュ・カントリー・ダンスの用語では出来るだけ長いロングウェイズでダンスが構成され、ダブル（デュプル）マイナーは2カップルのダンスで、いつも2カップルのラインで始まる。同様に、トリプル・マイナーはいつも3カップルで始める。）

音楽：ミュージシャンのリン・スコットとサム・バーカーンが会合に参加した。彼らはたくさんの古いメロディ、主に18世紀からの音楽セットを組み立てた。18世紀半ばで唯一入手可能な楽器、フィドルやチェロを使ってダンスの数曲を演奏した。その演奏ではチェロのための音楽の重要な編曲がなされていた。*The Haughs of Cromdale* のためのセカンド・チューンの音楽セットは、ジョセフ・ロウが作曲した *Mrs Mcinroy of Lude* だった。これらのダンスの多くは一般的ではなく、特に28小節の *Princess Royal* では新しい音楽セットが必要だったので、ミュージシャンの仕事は簡単なものではなかった。

SCDの発展：私の妻、クリスティンと私はケンブリッジ（UK）におけるキャプリオール・ダンサーズのダンシングを覚えているが、彼らは初期のヒストリカル・ダンスを踊り、たくさんのデモンストレーションを行った。（私たちは初心者に戻り、SCDで使っているものと似ているが、同じではない踊り方で踊ることは、謙虚で挑戦的であると感じた。）私たちはこのグループとダンスの古い形態について話をした。彼らが言うには主な問題点は、以前から演じられてきた踊りとステップをどの様に解釈するかである。彼らは17,18世紀から伝わってきたダンスの踊り方説明からそれらを復元した。わが創始者たち、とくにミス・ミリガンとミセス・スチュアートはダンスや音楽の復元に多大な努力を払った。古いダンスの多くはセットを作らずロング・ラインで行い、音楽には、「皆の意向により、できるだけ長く」というような指示があった。ソサエティは、ラウンド・ザ・ルーム形式のダンス以外は、すべてのダンスでセットを作って踊る様に決めた。（イングリッシュ・カントリー・ダンスおよびアメリカン・コントラ・ダンスではセットを作らず、ロング・ラインで踊る）

いくつかの参考文献：SCDが現在のRSCDS方式でどのように発展したかを示す優れた歴史書の1つが、ヒュー・フォスの*"Evolution of Scottish Country Dancing"ダンシングの改革*（1973年）である。フォスは、スコティッシュ・カントリー・ダンシングのRSCDSスタイルが、ジョン・プレイフォードの有名な多冊のダンス本 *The Compleat Dancing Master*（1651年以降）からどのように発展したかを説明している。フォスは、「ミス・ミリガンとミセス・スチュワートは、オールド・ダンサーによるデモンストレーションと口承によってステップを自分たちのものにしたので、おそらく1860年から1880年にかけてのスタイルを取り入れたのだろう」と述べている。
（写真：プレイフォードの引用文）

プーセットの復元：初期のダンスの多くはプーセットで終わる。*St Bernard's Waltz* のような'オールドタイム'ボールルーム・ダンスはしばしば4小節のワルツかロータリー（回転）シャッセまたはポルカターンで終わる。初期のダンスでは、当時のプーセットがどんなものであれ、明らかに同様のダンスのエンディングの役割を果たしていた。

フォスによると、RSCDSの現代のプーセットのやり方は1790年のバランタイン手書き写本の解釈に基づいている。アリー・アンダーソンとジョン・ダシーによる*スコッティッシュ・カントリーダンシングのための完全なガイド*（1931年）の本ではプーセットの2つの解釈について説明されていて、その内の1つが'ボーダー地方で人気のあるやり方'である。（私のダンス *Borders Traditional* でこの代替形式のやり方を使った。このやり方では男性は右足で始める。）多くの古い文書と説明書があるが、RSCDSのダンスは主にイングリッシュ・カントリー・ダンスから発展している。例えば、*The Triumph* は1809年のイングリッシュ・カントリー・ダンス版からであり、有名な著述家のセシル・シャープが言っているが、"パートナーに会うとプーセットはワルツの形になり、全体のセットのラインの間で小さいサークルで踊り回る。最終小節の初めに彼らは離れて、元に戻り、お辞儀をする。"

限定的なフォーメーション：今日では、ダンスのフォームごとに種々のフォーメーションがある。中には多すぎる提案をする人もいる。初期のダンスではそんなことはなかったし、伝統的な中核のフォーメーションはまったくありふれたものであった。例えば、フォスが述べているが、1－16のBookでプログレッシブ・ダンスは171，ダウン・ザ・ミドル・アンド・アップが53，プーセットが37，ライツ・アンド・レフツが30、セット・アンド・ターン・コーナーズが28、など。

当日：私たちが踊ったダンスは *Light and Airy, The Triumph, Lady Macintosh's Rant, Rory O'More, The Haughs O'Cromdale, The Princess Royal, The Haymakers, The Duke of Hamilton's Reel, The Merry Dancers, Dumbarton Durms*。私はそれらのダンスの中で異なる解釈のある RSCDS 版の Book を持っている。例えば、*Rory O'More* では 1st カップルが中央をダンスダウンして後ろ向きで元に戻るが、私はダンサーにそうするように頼んだ。私はまた *Light and Airy* の 2 回目のときにターン・コーナーズ・アンド・パートナーでダンサーがエルボグリップ・ターンをするようにしたが、これは 20 世紀初期には極めて普通のことだった。*The Merry Dancers* ではセッティング・ツー・アンド・ターン・コーナーズのフォーメーションでスキップ・チェンジを使うように提案した。このフォーメーションを如何に踊るかについて、ミス・アリー・アンダーソンとミス・ミリガンとで異なる見解があったことをみなで論議することができた。私はまた *The Triumph* でも多くの解釈を論議した。

それらのダンスはすべて非常に楽しくそれぞれのちょっとした癖があった。当日は大成功だったが、人々は明らかに幾分疲れていた。古いダンスはすばらしい旋律を持っておりとても力強い。私は彼らに挑戦してみるように勧めた！（17 世紀のもう一つの方法を使って）下記のプレイフォードの初版（1651 年）の *Art of Dancing* からの引用文で締めくくる。

"アート・オブ・ダンシングと呼ばれている古代ギリシャの舞踏はタイミング良く礼儀正しく使われれば、若い紳士たちにとっては賞賛に値する希有な性質を持つ。しかもかの有名な哲学者のプラトンは若い独創的な子供たちがダンスを教わればそれを満たすと考えた。"

（広告写真：世界中のスコティッシュの音楽とダンスの祝典）

コリン・デュアー・スコティッシュ・ダンス・バンドで録音された新しい RSCDS のアルバムが、ダンス作者、テーマ、場所を通して 6 大陸に関連した 16 ダンスにスポットを当て、ダンサーをスコットランドから世界中を旅させ、その後で The Homecoming Dance で皆を一つにする。

国際ブランチの 20 年　(p.19 - 21)

ジェームズ・ヒル、マーガレット・ランボーン、ピア・ウォーカー、ジャン・ジョーンズに感謝を込めてフィオナ・グラントとロナルド・カリーがこれを著す。写真提供：マルティナ・ミューラー＝フランツ、クリス・ハリス、アンドレア・ボッカフォーリ。

（写真：2017 年、キプロスのパフォスにて RSCDS 国際ブランチのメンバーたち）

RSCDS 国際ブランチ（インターナショナル・ブランチ、IB）は、地元のブランチが近くにないため、ソサエティ内での発言権を持てないダンサーに、友情と支援を提供するために設立された。また、多くの他のダンサーも、遠く離れたダンサーと交流したり、資金を集めたり、ワークショップや講習会に参加したい孤立したダンサーに、ホスピタリティを提供したりするために、セカンド・ブランチとして国際ブランチに参加している。この特徴的なブランチは 2024 年に創立 20 周年を迎え、世界中の小規模なダンス・グループが共に踊る楽しみを共有するため、尽力してきたその独自の発展と成功が祝われている。

独特の始まり

20 年以上前、RSCDS の管理体制に大きな変革が行われた。それまで各ブランチからの代表で構成されていた旧執行評議会が、2002 年の年次総会（AGM）で 15 名の選出メンバーから成る役員会に置き換えられた。この新しい憲章では、RSCDS の正式な「会員」は各ブランチの会員であり、会員は各ブランチの代表を通じて RSCDS の総会で発言権を持つことになった。しかし、ブランチに属さず、発言権のない「本部直接会員（Headquarters members）」と呼ばれるメンバーが存在していた。税務当局（Inland Revenue）からの助言により、発言権を持たない会員を設けることはできないとされた。

同時期、地理的に分散した人々を結びつける国際的な組織の利点についての議論が行われていた。地元のブランチから遠く離れている人々は、本部直接会員として入会するか、まったく入会しないかのどちらかであった。本部に所属していた多くの人は、自分たちの利益を考慮してくれる組織の一員であるとは感じられなかったのである。

このような背景の中、国際組織の設立を役員会に求める要望が提出された際、状況が整った。発言権の欠如と所属先の不在という両方の課題が、新しいブランチを設立することで解決できると認識された。2004 年 4 月の役員会で、「現在の本部直接会員による『国際組織』を形成する可能性を役員会が認める」動議が可決された。また、すべての本部直接会員に対して、新しい国際ブランチ、他の既存ブランチへの参加、あるいは RSCDS 本部を通じて発言権のない会員として残るかの選択肢が与えられることが合意された。さらに、今後は新規の本部直接

会員を受け入れず、すべての新会員は最寄りのブランチまたは国際ブランチに入会することとされた。その後、一部の人が発言権がないにもかかわらず本部直接会員を希望することが判明し、この選択肢も引き続き維持されることになった。

（写真：2011 年、チェコ・プラハでのダンス会）
（写真：2007 年、エストニア・タリンでの集い）

初期の日々

国際ブランチは 2004 年に設立された。初期のブランチ委員会は、ステファニー・ロバートソン、ピア・ウォーカー、マーガレット・ランボーンで構成されており、その後すぐにバーニー・ヒューイットとヨハン・ベルクが加わった。スージ・マイヤーが国際ブランチ委員会と役員会の連絡役を務めた。

2005 年 2 月時点では 9 カ国、35 人の会員であったが、会員数は急速に増加した。ブランチ設立 10 周年の頃には、25 カ国に 250 人の会員が所属していた。現在、会員は 483 人に達し、そのうち 204 人は国際ブランチをメインのブランチとし、さらに 279 人が追加会員としてブランチの活動を支援している。私たちは世界 32 カ国で踊っており、大半はダンサーだが、数人の優れた SCD ミュージシャンもブランチのメンバーである。

ブランチの活動

当初、ブランチ・メンバーの多くは、セント・アンドルーズのサマースクールやレヒベルク、ルクセンブルク、ブリュッセルでのダンスワークショップなど、よその組織のダンス・イベントで出会っていた。また、バーニーが制作した四半期ごとのニュースレターが手渡しや郵送、電子メールで配布され、情報や有益なアドバイスが提供された。当時、多くのブランチはこのような連絡手段を持っていなかったため、会員同士が繋がり、広いダンス界や本部での出来事を知ることができたのは、大きな成長のきっかけとなった。ダンス・イベントでは、ブランチ・メンバー向けに軽食と飲み物を提供するパーティを開催し、他の人たちの参加も促した。

2007 年、ピアが某所で指導した後、エストニアのタリンで週末のイベントを開催し、現地グループへの勧誘を促すことにした。週末イベントは大盛況で、満員となり、周辺地域での観光も数日間企画された。ティーチャー陣はジェシー・スチュアート、スージ・マイヤー、パトリック・シャモワで、バーニー・ヒューイット、アンドルー・ライアン、ジェームズ・グレイ、ジョン・ホワイトがミュージシャンを務めた。

この成功に続き、多くの国際イベントが開催された。ダンファームリン（スコットランド）、プラハ（チェコ）、キラーニー（アイルランド）、マントン・サン・ベルナール（フランス）、コペンハーゲン（デンマーク）、パフォス（キプロス）、ユトレヒト（オランダ）、チヴィタノーヴァ・マルケ（イタリア）などである。2024 年 9 月のノルウェー・オスロのイベントも満員であった。私たちは 2 年ごとに異なる場所でイベントを企画し、小規模なグループが一流のティーチャーやミュージシャンと出会う機会を提供することを目指している。バンドやティーチャー、そしてダンサーたちが集まり、一部のクラスでは 1 セットや 2 セットしかないような環境で忘れられない経験を提供している。

スージ・マイヤー基金

スージ・マイヤーは、ネイティブ以上に英語が堪能なオーストリア人で、鈍感な人や気取った人を好まなかったが、友人に対しては非常に忠実な人物だった。彼女はカントリーとステップ・ダンシングの両方で優れたティーチャーであり、ダンサーでもあり、ウィーン・ブランチの創設者であり、国際ブランチ設立の原動力でもあった。　（2012 年、56 歳でがんにより死去）

スージ・マイヤー基金は彼女の功績を称え、国際ブランチやスコティッシュ・カントリー・ダンシングの目標を推進するための支援を必要とするグループや個人を支援するために設立された。ブランチの年間収益は基金に寄付され、多くの会員からの寛大な寄付と共に、小規模なダンス・グループでの SCD の楽しみを広めるためにダンサーやティーチャー、ミュージシャンの支援が可能になった。例えば、会員がティーチャーとしての訓練を受けることができたり、ミュージシャンやティーチャーが小さなダンス・グループを訪問するための旅費が支援されたりした。2014 年 4 月以降、59 件の支援が行われ、総額£35,000 に達している。

未来に向けて

電子通信の発展により、ここ数年で国際ブランチの会員間の連絡が一変した。クリス・ハリスはウェブサイトを常に更新し、使いやすく、情報豊富に保つというすばらしい仕事をしてくれている。会員がイベントに参加登録し、会費を複数の通貨で支払えるオンライン・フォームもスムーズに機能している。毎年 12 月に行われるオンライン AGM の巧みな運営も見事である。

ブランチ委員会は Zoom を活用して効率的にブランチを運営している。オンライン AGM は約 1 週間にわたって開催されるため、どこに住んでいても参加できる。ブランチおよび RSCDS の委員会での役職は、メール投票によって決定されるため、すべての会員がブランチと RSCDS の運営に参加できるようになっている。

（写真：2009 年、スコットランド・ダンファームリン）
（写真：スージ・マイヤー：国際ブランチのインスピレ

ーションあふれた創設者）
（写真：2015 年、デンマーク・コペンハーゲン）

四半期ごとのニュースレターは今も発行されている。編集者のハリー・アンドルーズとジャン・ジョーンズは、地域の小グループや個人からのニュースをいつでも喜んで受け付けている。国際ブランチの写真は、世界中の多くのダンス・イベントで定番のスポットライトとなり、国際ブランチニュースレターの報告にも頻繁に登場している。また、ニュースレターでは、今後のダンス・イベントや日程についても知ることができ、他の国際ブランチ・メンバーが参加する可能性も高い。

しかし、現状に満足せず、RSCDS ユース・ブランチとの関係をさらに発展させていきたいと考えている。ユース・ブランチも世界中の会員を集めており、35 歳を超えたメンバーが自然に国際ブランチに加入する流れを期待している。そのため、ユース・ブランチのメンバーは国際ブランチに無料で加入でき、すでに広いコミュニティの一員としての一体感を感じられるようになっている。最近では共同活動も行われ、両ブランチとも協力関係の強化を望んでいる。

国際ブランチのすべてのイベントは好評で、主要イベントの間の年に小規模なイベントを開催することも検討されている。これにより、異なる国々の多くの人々が、優れたミュージシャンによるライブ音楽と共にダンシングを楽しむことができるようになる。来年、クレタ島での実験的なイベント開催が検討されており、2026 年に日本でのイベントを開催する準備も進められている。国際ブランチのイベントはすべての人に開放されているが、ブランチ・メンバーには優先的に参加権が与えられる。異国でのダンスや SCD に興味を持つ仲間と出会う体験を楽しむための誘因にもなっている。ブランチは、イベントの開催場所やテーマに関する提案や、会員の体験をより充実させるための発議についても常に会員からの提案を歓迎している。

最後に

国際ブランチの創設者たちのビジョンは現実のものとなった。創設者たちは、他のブランチから離れたダンサーたちが繋がりを感じ、SCD の発展を世界中で支援することを目指した。20 年前の小さな始まりから、ブランチは会員数を増やし、地域で SCD を発展させるために世界中のダンサーやミュージシャンに財政的支援を提供してきた。また、国際ブランチは、多くの人々が大勢のダンサーと共にライブ音楽で踊る楽しさを初めて体験できるイベントを開催してきた。

最近になって SCD の楽しさを知った国々での成長と熱意は、国際ブランチが会員数をさらに増やし、孤立したダンサーや小規模な SCD グループを支援する余地があることを示唆している。国際ブランチのメンバーは SCD に対する情熱をイベントに持ち込み、世界中で多くの人々と一緒に楽しいひと時を共有し、参加者数を増やしていく役割を担っている。

世界各地からのニュース　(p.22 – 23)

各ブランチおよび関連グループのニュース（200 字以内）はカロライン・ブロックバンクまでご送付を。

第 13 回ミッドウエスト・スコティッシュ・ウィークエンドのハイライト

（写真）ようこそ、新しいダンサー・ファミリー、エイブリー、タナ、コナー・ベンベネック

第 13 回ミッドウエスト・スコティッシュ・ウィークエンドが、2024 年 6 月 7 日から 9 日まで、ウィスコンシン州ビーバーダムのウェイランド・アカデミーで開催された。参加者は「楽しいイベントでした。楽しく勉強できる週末を作るために尽力してくださったすべての方々に感謝しています。」と語った。

この滞在型ワークショップでは、アーサー・マクネアとジェニファー・ライナーがクラスとイベントを指導し、参加者からは「すばらしい」と好評だった。ダンスの社交的な側面がいかに経験全体を向上させるかが示された。アーサーとジェニファーのコミュニケーションとユーモアのセンスはすばらしかった。トリオ・テルプシコレ（ギリシャ神話に登場する舞踊と合唱の女神の名）のミュージシャンは、名人フィドル奏者のエルカ・ベイカー、熟練ピアニストのリズ・ドナルドソン、多才なベーシスト兼チェリストのラルフ・ゴードンだった。テルプシコレは、インスピレーションに満ちたニュアンス豊かな音楽で、ダンサーのモチベーションを文句なしに高めてくれた。

最近加わったダンサー・ファミリーの一人はこう言った：「私たち家族にとって、夏の幕開けにふさわしいダンスでした！私とティーンエイジャーの子どもたちが初めてスコティッシュ・ダンスを踊ったのは、9 ヶ月前のことでした。それ以来、私たちはこの冒険をあますことなく楽しんできました。終わるまでに足腰がどれほど痛くなるか、また、どれだけの新しい友人や楽しい話を持って帰れるか、私たちは想像もしていませんでした。私たちはすでに次のケイリーの出し物（これが何なのか、ようやくわかりました。）を計画しており、来年も必ず戻ってくるつもりです。」

ダイアナ・ハンクス　　（写真）2024 ミッドウエスト・スコティッシュ・ウィークエンド

フレンチ・アルプスでもう一つのSCDウィークエンド

（写真）メオードル・リール年次 SCD ウィークエンドに参加したダンサーたち

6月1日と2日、メオードル・リールは毎年恒例のSCDウィークエンドを開催した。標高1,000メートルの山間にある小さな村メオードルは、さまざまなタータンチェックを身にまとった約70人のダンサーで埋め尽くされた。チームはこの特別なイベントのためにヨーロッパから豪華なメンバーを招いた。：デビッド・ホール（ロンドン・ブランチ）とフローレンス・バーギー（ジュネーブ SCD クラブ）がティーチャーを務め、ブノワ・ギブソンとトーマス・ゴンカルベス（リスボン）が素敵な音楽を奏でた。

土曜まる一日、ワークショップ（SCDのレベル別クラス、子どもクラス、ハイランド）で踊った後、メオードル・リールのダンサーたちによるデモが行われた。13人のメオードル・リールのダンサーが、この夏、3度目のツアーとしてブルターニュへ行くことになっている。ポルト・ルイは車で北に10時間ほどの距離である。メオードル・リールのダンサーたちは、特別なドレスを着て、この遠征ツアーのために造られた *A Black and White Flag* を踊った。ブルトン・ストライプはタータンチェックの正方形と合わず、漁師のブーツはパ・デ・バスクには不便で、女性はみな漁網を持って踊るのだが、ダンサーたちは愉快なダンスショーを見事に披露した。また来年、新しいメオードル・リールのサプライズをお楽しみに！

ソフィー・マルシャン

シャフツベリー＆イースト・ノイルSCDグループ

4月、美しく晴れ渡ったこの日、ダーウェストン・ビレッジ・ホールにおいて、素敵なビュッフェランチ付きのアニバーサリー・ダンス会が開催された。RSCDSの100周年と、シャフツベリー＆イースト・ノイル SCD クラブの55周年を祝うものであった。ドーセット、サマセット、ウィルトシャー、ハンプシャー、さらに遠方の街にあるクラブから、約60名のダンサーが参加してくれた。すばらしい4人組のクレイゲラヒ・バンドが演奏してくれたのは、とても嬉しかった。プログラムにはすばらしい曲がたくさんあった。友情、食事、音楽、そしてダンスですばらしい思い出に残る時間を過ごした。もちろん、ケーキも食べた—そしてそれはなんと見事なものだったことか。私たちは皆、それを作ったクラブメンバーの腕前に驚かされた。

ニッキー・タイソン

（写真）シャフツベリー100周年記念に集うダンサーとバンドメンバー

（写真）実に見事なケーキである！

東海ブランチのうれしいニュース

東海ブランチは日本に3つあるブランチのひとつである。今年の総会では、2つのすばらしいニュースが発表された。一つ目は、久しぶりのブランチ賞贈呈である。スコティッシュ・カントリー・ダンシングの普及に長年多大な貢献をしてきた増本サチ子さんにブランチ賞が贈られた。当日、RSCDS チェアのウィリアム・ウィリアムソンと近藤雅洋ブランチ・チェアのサイン入り賞状を携えた受賞者とともに、記念撮影が行われた。(写真、前列中央。)

また今年はうれしいことに、14歳の中学生を初めてのユース・メンバーとして迎えることができた！彼女は長年在籍しているメンバーの孫で、祖母が楽しそうに踊っている姿を見てダンスを始めたとのこと。年次総会後のブランチ・クラスにも参加してくれて、一緒にダンスを楽しんだ。（写真、前列右から3番目。）私たちは老若男女を問わず、末永く一緒に踊れることをとてもうれしく思っている。

赤松洋子　　（写真撮影：小宮芙巳子）

ウィーン・アニバーサリー・ウィークエンド

ウィーン・ブランチはウィットサンデー（5月17日～20日）で、ワークショップとダンス会のウィークエンド・コースを開催し、創立35周年を祝った。12カ国から80人以上のダンサーが参加し、金曜日のウェルカム・ダンスにはブランチ・メンバー、土曜日のソーシャルと日曜日のボールにはブダペストの友人たちが参加した。ボールでは、ジェームズ・グレイとマティアス・ランクがヨハン・シュトラウスの曲を *The Ambassadors' Reel* にアレンジし、忘れがたいもてなしを提供してくれた。

ガリー・クールの指導はインスピレーションに富み、彼の軽妙なアプローチで、月曜日の早朝にダブル・トライアングルを踊らなければならなかったときでさえ、みな元気でいられた！シルケ・グロショルツのすばらしい演奏は、指導を完璧に補完していた。土曜日の午後は、何人かはニコル・ピーパーがフックスビラ（幻想派画家エルンスト・フックスの美術館）を案内し、それ以外の人はケイト・ジェントルズが指導するステップ・クラスに参加した。また日曜の午後、フェリックス・ハメルベックが大勢を率いてウィーン市内散策を行った。

ベクシー（ベアトリクス）・ウェプナーはこのウィークエンドを見事にオーガナイズしてくれた。人数は予想より少なかったものの、ダンスフロアは心地よく満席であったが、混雑することはなく、温かくフレンドリーな雰囲気のおかげで非常に楽しい体験となった。

ティム・ボルトン－マグス

ジョン・パイパー大佐 – *A Merry Lad of Ayr* エアの陽気な若者　(p.24 – 26)

ヘザー・ブラスデール=クラーク博士はオーストラリアの文化史研究者である。彼女はオーストラリアの古い時代のダンスに関する研究を、魅力的なウェブサイト上で公開している。これはその記事から抜粋したものである。

（写真）ジョン・パイパー大佐肖像画

ジョン・パイパー大佐はダンスをこよなく愛する人物だった。エアシャー出身の生粋のスコットランド人で、オーストラリア植民地時代初期を代表する人物となり、音楽とダンシングを中心とした優雅で華やかなライフスタイルを築き上げた。

ジョンはスコットランド南西部、エアシャーのメイボールという小さな町の出身だった。両親は、ハイ・ストリートのキングズ・アームズ・ホテルを経営していて、1774 年 8 月 8 日、彼はそこで誕生した。そのホテルは、駅馬車の宿として、グラスゴーとアイルランドを行き来する旅行者に人気があり、地元の人々にも大評判の、誰もが集まってくる場所だった。有名なスコットランドの詩人、ロバート・バーンズがこの宿で楽しい一夜を過ごしたのは、ジョンが 12 歳のときで、ジョンは生涯を通じて、スコットランドの伝統を誇りに思い、バーンズの熱烈な崇拝者であり続けた。

1791 年、ジョンが 16 歳のとき、叔父が彼のために、新しく結成されたニュー・サウス・ウェールズ連隊の将校の地位を得てくれた。ジョンが入隊のためにロンドンに到着すると、この青年が「地理とフランス語会話を学び、算術と剣術を学び、舞踊を見る機会を得る」ためにアカデミーに通えるよう、叔父が連隊長の同意をとりつけてくれた。そのころのジョンの性格が垣間見えるエピソードとして、彼は妹にこう書いている、

「でもね、叔父さんはアカデミアの人たちに、僕がロンドンで一番上手な踊り手だと紹介したんだよ。」。

パイパーが連隊とともにシドニー・タウンに到着したのは 1792 年のことで、まだ植民地が誕生して 4 年しか経っていなかった。彼はすぐに地方政府庁舎を中心とした社交界の一員となり、その魅力的で気さくな性格で人気を博した。3 年もしないうちに大尉に昇進し、1806 年には大佐にまで昇進した。

パイパーはノーフォーク島（編注：ノーフォーク島の流刑植民地）に2度赴任し、1804年には司令官代理となった。最初の流刑植民船団の植民者の娘メアリー・アン・シアーズと出会ったのは、この島の司令官時代だったと考えられている。二人は 1816 年に結婚し、生涯を共にした。注目すべきは、メアリー・アンが流刑者家族の出であったにもかかわらず、植民地社会のエリートの一人として広く受け入れられる存在になったことである。おそらくこれは、パイパーが非常に社交的で魅力的な性格であったために違いない。彼には、華やかな社交界に誰をも拒むことなく迎え入れるようなところがあった。

大佐の地位は、1814 年にシドニー軍港付き海軍士官となったことで、飛躍的に高まった。それまでにすでに社交界の重鎮になっていた彼は、この地位を得たことで、この植民地で最も高額な収入を得る者の一人となり、人々に与える歓待の幅をさらに広げることができるようになった。彼は港湾長として、（水先案内人を除けば）入港する船に最初に乗り込む人物となり、新鮮な物資を運び入れ、船長や乗客を歓待し、接待の招待状を送った。

新たな富を得たパイパーは、海軍省の官邸であった質素な木造の家から引っ越し、元陸軍将校として与えられた土地を活用する時が来たと考えた。ロンドンのリージェンツ・パーク周辺で見た美しい邸宅に感銘を受けていた彼は、囚人建築家のフランシス・グリーンウェイに依頼し、壮麗な邸宅を設計させた。この邸宅には、ドーム型の天井を持つセント・アンドルーズ・クロスの形をした見事な舞踏室まであった。この邸宅はシドニーの社交界の中心地となり、ピクニック、晩餐会、祝宴、舞踏会など、ほとんどすべての行事にダンスが含まれ、3 日間も続くような楽しい催しもあったようだ。大佐のスコットランドの血筋から考えれば当然かもしれないが、彼にとってダンシングは何より大切なものであった

植民地社会のエリートの一人として、パイパーは多数の囚人労働者（100 人近く）を使うことを許されていた。庭師、家政婦、従僕、御者などとして、大邸宅を維持するのに必要なあらゆる仕事を、彼らがこなした。さらに彼は、スコットランドの曲や当時流行のダンス音楽を演奏する楽団を育成した。彼は常にハイランド・パイパーを雇って身近に置き、思い入れのあるスコットランド音楽を演奏させた。もしかしたら、港湾長としての立場を利用して、音楽の才能のある受刑者をまずこの楽団に組み入れるよう、振り分けていたのかもしれない。

（写真）ヘンリエッタ・ヴィラの巨大な舞踏室はセント・アンドルーズ・クロスの形をしている。フレデリック・ガーリングの作とされる絵画。ニュー・サウス・ウェールズ州立図書館のミッチェル図書館蔵。

（写真）このフィドルは、ロバート・バーンズに踊りを教えたウィリアム・グレッグのものである。若き日のジョン・パイパーもグレッグからダンシングを習ったと思われる。

●「彼の邸宅に船で向かう間、船上にはハイランドの正装を身にまとったスコットランドのバグパイパーがいて、船旅の間中、ゲストのために演奏していた。

●「パイパーは客をフェリーで船着場まで連れて行き、そこで揃いの制服を着た召使が華やかに演奏して歓迎した」。

●「彼は楽隊を持っていて、広いベランダの下で毎晩カド

リールを演奏させていた」。

この楽団はヘンリエッタ・ヴィラと呼ばれる邸宅で行われる行事で演奏するだけでなく、公の行事や一般の個人が催す行事にも貸し出されていて、その中にはジョン・ジャミソン卿が催した舞踏会もあったようだ：

●「先週の木曜日の夜にジョン・ジャミソン卿によって催された舞踏会と晩餐会は、非常に魅力的で華やかなものだった。この日のために舞踏室は実に豪華にしつらえてあった。社交界の人々が集まってくるのは8時から9時ごろだったので、その時間帯の通りは、大急ぎで走りすぎるたくさんの馬車でにぎわった。パイパー大佐は、このような時いつも必ずしているようにこの日も、高貴な主催者に自分の楽団を随行させていた。ダンスでは、カントリー・ダンス、カドリール、スパニッシュ・ワルツが踊られたのだが、始まるや否やものすごい盛り上がり方で、それは途絶えることなくずっと続いた。

長年にわたり、シドニーの多くの舞踏会場の演奏は、パイパーおかかえの楽団と駐屯連隊軍楽隊が独占していた。例えば1825年のターフ・クラブの舞踏会では：

●「ダンスは9時に始まり、12時に夕食で中断した後、また再開され、夜明けまで続けられた。パイパー大佐の楽団の協力も得た第40軍楽隊が、夜の間じゅう最高に魅力的な音楽を演奏しつづけた。」

1826年、パイパー楽団はウィリアム・コックスの豪邸で行われた特別な祝宴で音楽を担当した。パイパーの従姉妹エリザベスが、地元のエリート一家の一員ウィリアム・コックス・ジュニアと結婚したため、両家がしばしば植民地の貴族たちのために接待を行っていたのである。

●「ウィンザー近郊のコックス大佐の接待専用の邸宅であるクラレンドン邸では、先週、たいへん陽気でにぎやかなイベントが開かれた。偉大な当主の幼い孫の3人が英国教会で洗礼を受けたことを祝して、この日、大勢の人々が集まった。パイパー大佐のスコティッシュ・バンドがシドニーから到着し、場を盛り上げ、それでなくても盛り上がっているところに、さらに特別なハーモニーを加えた。

このパイパー大佐のキャリアは、新総督のラルフ・ダーリング卿が着任し、現地の海軍省の状態について調査を命じたとき、幕を閉じた。パイパーが関税の徴収について重大な管理ミスを犯していたことが判明したためである。パイパーが、債務者に厳しく支払いを求めるよりも、債務者とヴィラで昼食をとる方を優先していたことはよく知られていた！

彼の富は枯渇し、パイパーは、家族と共にバサーストから4マイル離れたアロウェイ・バンクに移り住んだ。それでも、シドニーを出発し、ブルー・マウンテンズを通過する彼らの道中でさえ、音楽は欠かせなかった：

●「いかなる土地にいようとも、調和と親睦をもとめるパイパー大佐は、最後にバサーストの領地に定住することになった。ブルー・マウンテンズを通り過ぎる時、家具を積んだ荷馬車の最後尾から鳴り響いていたのは、『丘を越えてその先へ』"Over the Hills and far away"という軽快な曲だった。」

バサースト（シドニー西のブルー・マウンテンズを越えた高原の町）は10年ほど前に開拓されたばかりの土地だったが、一家が移り住んだ頃にはすでに、立派な家柄が住み着き、地元の地主階級を形成していた。その多くは退役陸軍将校で、それぞれ2000エーカーもの広大な土地を与えられていて、パイパー家とも既知の仲だった。大佐の一家はすぐに隣人や友人たちに歓迎され、優雅な社交界で新たな一歩を踏み出した。

しかしバサースト！
その木立、その丘、その谷は、
今、かの歓声に包まれる
アロウェイの地は
その豊かな領主として彼を戴き
羊飼いたちは彼を喜び受け入れる歌を歌う

アロウェイは、スコットランドにおけるパイパーの生誕地の近隣の村であり、かのロバート・バーンズの生誕の土地として知られている。アロウェイ・ハウスはスコットランドでよく使われる人気曲でもあり、大佐は自分の新居をアロウェイ・バンクと名付けた。

環境が変わっても、パイパーは引き続き楽団を手元に置き続けた。ある訪問者はその楽団の演奏を耳にして驚いたことを回想している。

●「バサースト滞在中のある日、私はパイパー大佐の家で午後のひとときを過ごした。私たちがちょうどいとまを告げようとしていたところ、ベランダの下から、数人の農場の使用人だけで構成されたバンドの演奏による、スコットランドの音楽が聞こえてきた。正直に言ってしまうと、それは全く予想できないほど、すばらしく活き活きとした演奏だった...」

ダンスは、パイパーとその家族にとって欠かせないお気にいりの娯楽だった。娘のアンも「来客があるときはダンスのための音楽があるのがあたりまえだった」と日記に記している。バサーストには連隊が駐屯していたため、ダンスや舞踏会への招待が頻繁にあった。1828年、ジョン・ハリス博士を讃える舞踏会と晩餐会がバサーストのガバメント・ハウスで開かれ、音楽はパイパー楽団が担当した。

（写真）「パイパーの家は、ニュー・サウス・ウェールズの環境が、優雅で礼儀正しく豪奢なものになりうることを証明した。」

●「翌週の火曜日、地方政府官邸は、偉大なる老ドクターを歓迎するための舞踏会と夕食会に向け、膨大な準備の慌ただしさに包まれていた。その夜、ロクスバラ郡の「美とファッション」のすべてがこの邸宅を彩り、パイパー大佐の活気あふれる楽団は、朝日が東の平原を照らすまで、

人々を軽快なステップで楽しませた。

ダンスが夜通し続くことは珍しくなかった。バサースト競馬場で開催された寄付金集めのための舞踏会の記事がそれを示している。

●「ディロン氏のホテルでは、バサーストとその近郊の紳士たちによる定期舞踏会が開催され、この地区のすべての特権階級たちが出席した。部屋はエレガントに飾られ、パイパー大佐の楽団が登場し、9 時にカドリールが始まり、いつもながらのすばらしい演奏をさらに上回るほどのすばらしい演奏だった。1 時に、一同はダンスフロアを離れ、優雅に並べられた季節の味覚満載の豪華な晩餐を楽しんだ。晩餐後、ダンスは大盛り上がりの中ふたたび始まり、それは夜が明けるまで続いた。」

シドニー、バサースト、いずれにおいても、パイパーの人気は社会の垣根を越えて広がっていたが、慈善基金、聖書ソサエティやさまざまな宗派の教会に惜しみない支援を行うことで、さらに博愛主義者としての名声をあらゆる階層から得た。

陽気で楽しい、千の顔を持つ男。
陽気な古き良きイングランドの象徴、
貧しい者だけでなく富める者にも、
聖職者だけでなく普通の人にも
どちらにも親しまれた、そんな男。

1838 年、再び財政難に陥ったパイパーはアロウェイ・バンク邸を売却し、一家はマッコーリー川を見下ろす質素な農家ウェストボーンに移り住んだ。パイパー大佐は1851 年に、メアリー・アンは1878 年に死去し、2 人ともバサーストの墓地に眠っている。

ダンシングはパイパーの人生の根幹を成す要素であり、同時代の人々も「彼はいつも友人を盛大にもてなした」と語っていた。初期の開拓者の中で、ジョン・パイパー大佐ほどよく知られ、人気のあった人物はいない。「温厚な典型的スコットランド人で、生まれながらの紳士のひとりであり、オーストラリアのプリンス 」として記憶されている。

この記事中の引用はすべて当時の出版物や書簡からのものである。詳しくは原文ウェブサイトを参照のこと。

The Merry Lads of Ayr 1803 年プレストンの 24 のカントリー・ダンスより。

個人所有の資料から:

パイパー大佐の時代に人気があったダンスの一つが『エアの陽気な若者たち』（*The Merry Lads of Ayr*）である。通常、当時の舞踏会やダンスについて書かれた記録には、カントリー・ダンスが踊られたことは記されていても、実際のダンスの名前が言及されていることはほとんどない。しかしパイパー大佐の、出身地がエアであり彼のスコットランドの伝統に対する情熱を考えると、『エアの陽気な若者たち』が彼の大舞踏会で踊られた可能性は高いと推測できる。このダンスは 19 世紀を通してスコットランドで流行し続け、1924 年にスコティッシュ・カントリー・ダンス・ソサエティが初めて出版した際も、その最初の出版物に収載された。

フランス、オート・サボワでスコットランドの音楽とダンス (p.27)

ダイアナ・サラン、リヨン フランス

車やバスでフレンチ・アルプスを巡り、アヌシー市を通り、東に向かう湖畔に沿って走り抜けているところを想像して欲しい。開いた窓から何が聞こえた？　ダンス *J. B. Milne* の音楽だろうか？まさか！もし通り過ぎたのが数分後だったら、それはマッキントッシュの素敵なジグだったかもしれない。しかし、それは決してあなたの想像や願望によるものではない。高いフェンスの向こうに、小川が流れる庭の中にあるすばらしい家があり、その中で 14 人の地元ミュージシャンがスコットランドの音楽を学ぼうと懸命に励んでいる。彼らは、イアン・ミュア（クライゲラヒー・バンドのメンバーであり元 RSCDS ミュージック・ディレクター）と、すばらしいフィドラーでありティーチャーでもあるジリアン・スティーブンソンのもとで研鑽できるという、大変恵まれた環境を与えられている。

彼らは、コンセルバトワール（音楽学校）で教えている2人のバイオリニストを含む6人のフィドラーと、ピアノ、アコーディオン、クラリネット、リコーダー、オカリナなどの若手とベテランの混成グループである！彼らは3 日間練習して、アヌシーで土曜日に開催されるソーシャルダンス・プログラムにあるダンスの演奏をしようとしていた（すべてのダンサーおよびミュージシャンも大満足の大成功を収めた）。その中には、すでにスコットランドのダンス音楽に親しんでいる人もいれば、最初の一歩を踏み出したばかりの人もいる。

イアンとジリアンが惜しみなく知識を分かち合ってくれたおかげで、彼らはジグ（シングルとダブル）の正しい弾き方、スターティング・コードとフィニッシング・コードの正しい演奏法、ジェームス・スコット・スキナーやロバート・マッキントッシュのような偉大なミュージシャンについてなど、多くのことを学んだ。彼らはすでに数週間、単独または小グループで別々に練習してきたが、バンドが一堂に会した時のサウンドは驚きである、彼らは、さまざまな理由で、セント・アンドルーズのサマースクールに参加するのが難しい、フランスの辺鄙な地域の控えめなミュージシャンたちなのだ。

しかし、彼らの熱心さが注目をよび、代りに提案された

のが、サマースクールを彼らのもとに持って来ることだった。このあたりでは何キロ進んでもキルトなどは見当たらず、夜の楽しみのためのパーティールームもない。しかし、セント・アンドルーズのウェスト・サンズのような砂浜はなくても、その代わりに山や湖畔があり、ユニバシティ・ホールのもてなしの代りに、地元のもてなしと美味しいフランス料理を味わうことができる。だから、車を運転するときは窓を開けておくこと。思いもよらない場所でスコットランドのダンスミュージックが生き生きと演奏されていて、その驚くようなサウンドが聞こえるかもしれない！クライゲラヒー・バンドのYouTubeチャンネルでは、ライブ映像が見られる。　（オート・サボワは、上サボワまたは北サボワと訳すべきか。グルノーブルとスイスのジュネーブにはさまれた県）

ウィリアム・ウィリアムソン、ダウン・アンダーへ行く　(p.28)

ニュージーランド・ブランチのカイワカ・クラブのチェアであるアレックス・ダシーがRSCDSチェアであるウィリアム・ウィリアムソンとリンダ・ウィリアムソンのニュージーランド訪問について書いている。アレックスは、2018年に踊りを始めたばかりの比較的新しいダンサーであるが、皆で共有すべき思慮深い意見をもっている。　（ダウン・アンダーは英国から見て地球の反対側にある国々。行くには南下することから）

カイワカ・クラブでは、楽しみながらダンスをすることに重点を置いてきた。ダンシングを上達させることを望んではいるが、みんなが来るのは主に楽しむためだと感じている。特に初心者に対しては、フットワークを完全にするためよりも、みんなを立ち上がらせて踊らせることに時間を使うことになる。ダンシングをさらに上達させたい人は、オークランド-ノースランド地方近辺で行われている、技術的な質に焦点をあてる昼間のスクールや講習会に参加することができる。私たちのクラブの方針については、すべてのティーチャーたちから支持を得られるわけではない。しかしながら、活気に満ちて、だれでも受け入れるクラブ作りに関しては成功している。

去年、楽しさをテーマにしたレイバー・デー（10月第4月曜日）の週末スクールを催した。ニュージーランド中から来たティーチャーたちはこの考え方に賛同し、自分たちのクラスに楽しさを取り入れようとしている。この週末は大成功となった。

人口構成が変わり、技術によって社会構造がカントリー・ダンサーにとってあまり好ましくない方向へと動く可能性もある。しかしそんな中でも、スコティッシュ・カントリー・ダンスは、会員の要望に合わせて適応していくべきだと私は思う。このことは特に若い人にとって大事である。

私は最近、ニュージーランドのワイカト地方の国王誕生日（6月第1月曜日）の週末スクールに参加した。その週末行事の一部として、郊外にあるホールでケイリーが催された。スコティッシュ・カントリー・ダンスの主催者が運営していたが、地域社会を対象にしたものだった。ホールは、周辺からの人でいっぱいであった。3歳から90歳代までのすべての年代の人、100名以上が参加した。

若い人たちが、すわってiPadで人工的な文化を眺めているのではなく、自分たち独自の本来の文化を能動的に楽しんでいるのを見るのはよいことであった。

スコティッシュ・ダンサー全員の好みではなかったかもしれないが（来ない人や早めに帰った人もいた）、その種の需要があることを示したし、新しい会員を得ることができるかもしれない。残ったスコティッシュ・ダンス会員は、自分たち自身も楽しむとともにダンスがうまくいくように手伝ってくれた。

ウィリアムがニュージーランドを訪れたとき、私はオークランドの集会に出席し、彼が話すのを聞き、その後いくつかのダンシングに参加した。彼は、言うなれば新鮮な空気とも言うべき、自分の聴衆を引き付けるすばらしい話し手だと、私は思う。

私は、彼のメッセージの重要な点は、おおらかな心で誰をも歓迎する姿勢の尊重とこのマーケットを理解することの重要性ということだと思った。これは、われわれが推し進めようとしている方向と一致していた。ティーチャーはそのようなアプローチをとる必要がある。組織のトップからのこのメッセージは、組織の基調を決め、懐疑的な人にこれがとるべき方向だと伝えている。

しばらくのちに、私はクイーンズランド州ガットンで行われたウインタースクールに参加し、ウィリアムの仕事ぶりを見た。このとき、意識の変化が始まりつつあることが見てとれた。保守的な経験の長いダンサーやティーチャーたちの何人かが、これまでに比べておおらかな心で誰をも歓迎する姿勢への理解を増やそうと努めていた。それ見るのはよいことだった。

ウィリアムと妻のリンダは、前向きな変化をもたらす可能性のある強烈な印象をオーストラリア・ニュージーランドのダンサーたちに残した。私は、新チェアのガリー・クールが、彼らが築いた基盤を引き続き発展させるよう願う。

（写真）ウィリアム・ウィリアムソンのオークランド訪問
（写真）クイーンズランド・ウィンタースクールのケイリーで話すウィリアム

編集長への手紙　(p.29)

以下に紹介する手紙に述べられた意見は執筆者個人のものであり、RSCDS または役員会の見解を示すものではない。

会費はお得な金額

私たちは、物事がうまくいかない時に嘆き、不平を言うことに非常に長けているが、「ありがとう」と言うことにはそれほど長けていない。私は世界中の会員が集う 1 か月間のすばらしいイベントである、セント・アンドルーズのサマースクールで副校長として 2 週間を過ごし、先ほど帰宅したばかりである。サマースクールでたくさん行われた小さな集まりの一つで、RSCDS と他の団体の会費の比較について話し合った。王立鳥類保護協会（RSPB）の会員費は年間 60 ポンド、ナショナル・トラストはなんと 90 ポンドである。一方、私たちの会費は年間わずか 28 ポンドで、これにブランチが追加する金額が加わる。これは非常にお得な金額であるように思う。そのため、一部のダンサーが会費について不満を漏らすと、私は当惑する。私たちのソサエティは、私が所属する他のどの組織よりも、間違いなく友情、楽しみ、笑いを多く提供している。また、私たちの趣味が心肺の健康にどれほど役立つかということにも驚かされる。最近、定期的にジムに通っている方が私たちのダンス・グループに戻ってきて、私たちがダンスでどれほどエネルギーを使うかについて驚いていた。そのうえ、ジムのランニングマシンよりもずっと楽しい！私たちは、年 2 回発行のすばらしいマガジン、Branch mailing、月刊のニュースレターである Dance Scottish Together、そして最近始まった情報豊富で楽しい The Blether を通じて、以前よりもずっと多くの情報を得ている。また、フェイスブック、インスタグラム、ツイッターなどのソーシャルメディアでも、楽しく情報に満ちた投稿が数多くある。世界中に広がるファミリーの他のメンバーとも、さまざまな方法で連絡を取り合うことができる。これは RSCDS に所属する最も価値ある要素のひとつである。たとえ地元に留まっていても、スコティッシュ・ダンスのファミリーは平等に互いを支えあい、何かあれば祝福してくれる。いまこそこのすばらしいファミリーを、所属する価値のあるすばらしい組織にしてくれている事務局スタッフ、ソサエティ役員、そしてすべてのボランティアの方々に、心からの感謝を伝える時である。

ダイ・ルーニー、チェシャー・ブランチ

ソサエティは収入の範囲内で活動すべき

私は、かつてグラスゴー・ブランチのメンバーシップ・セクレタリーを務め（約 250 名のブランチの会費徴収を担当）、会計（すべての収入と支出を把握）を務めていた。トム・ウォード氏が、ソサエティの支出に関する透明性の欠如について寄稿（東京ブランチ版マガジン 38 号 p.26 - 27）したが、私も懸念を抱いているため、そこに返信する次第である。私が初めてブランチのメンバーシップ・セクレタリーに就任した際、本部への会費は 10 ポンド、ブランチへの会費は 5 ポンドで、2 : 1 の割合であった。その当時から、私は「なぜソサエティへの割合がこれほど高いのか」とたびたび尋ねられていた。それから 10 年以上経った現在、この比率は 4 : 1 にまで上昇している。つい最近、ブランチの会費が 7 ポンドに値上げされた。ソサエティの会費の急上昇により、ブランチが新会員を勧誘することがますます難しくなっている。「28 ポンドを払うと何が得られるのか」という問いに答えるのは、ますます困難になっている。

長年にわたり、ソサエティは活動内容を決定し、その費用を算出してから、単にブランチに「不足分を補填する」よう求めているという印象を与えてきた。

最近の役員会で、「今後 5 年間の想定予算に紐づく会費値上げ計画を 1 年間凍結する」という提案がなされたと聞いている。これは歓迎すべきことであるが、長期的な解決策ではなく、根本的な問題の解決にはならない。1 年間の値上げ見合わせの後はどうなるのか…翌年以降より大幅な値上げとなるのか？

もちろん、ソサエティは収入の範囲内で活動すべきである。現実的に、現在の予算内で達成できることを考え、主要な活動に焦点を絞り、その枠組みの中で達成できることを計画すべきである。これは数年かかるかもしれないが、今すぐに始めるべきである。難しい問題に関しては厳しい質疑があるかもしれない。人件費の見直しが必要？ コーツ・クレセント 12 番地の本部の維持にお金が掛かりすぎているのだろうか？これらの判断は容易ではないことは承知しているが、現状維持はもはや選択肢にはなりえない。

RSCDS はスコティッシュ・ダンシングの普及を第一の目的とする慈善団体であることを忘れてはならない。このことが本来注力すべきことであり、会費がその目的に使われているのかは多くの会員が期待するところであるのではないか。

世界中のスコティッシュ・ダンシング・コミュニティを代表して、役員会にこれらの意見を考慮し、それがコミュニティを代表するものであることを忘れないようお願いしたいと思う。ソサエティのために働く多くのボランティアやスタッフの努力に感謝していることは確かであるが、その努力の方向性については再考が必要であり、より効果的な組織へとシフトする必要があるように思われる。

メアリー・ウェブスター、グラスゴー・ブランチ

私はストラスペイが大好き

本誌 2024 年 4 月号（38 号）でのフットケアとフットウェアの記事に感謝する。まさに私が期待していた内容であった。1 つだけ小さな誤りがある。6 ステップの「ハイランド・フリング」には 192 回のジャンプがあり、102 回ではない。足に負担がかかるのも当然である！（編集長注：投書者は 2023 年 8 月に編集部に最近のフットケアとフットウェアの記事を提案した。）

ストックブリッジ・スコティッシュ・リーラーズに関する記事の多くに同意する。リーリングは、SCD の初心者にとって良い入門方法である。しかし、ストラスペイは退屈だというインタビュー回答者の意見には同意しかねる。私は 70 歳で、50 年近く踊ってきた。現在パーキンソン病を患っており、多くのクイックダンスは踊れないため、私のダンスは主にストラスペイである。私はストラスペイが大好きで、その音楽も美しいと思っている。バラエティに富んでおり、力強い付点リズムのストラスペイや、ゆったりとしたエアもある。

エリザベス・ベネット、クロイドンおよび同地域ブランチ、ロンドン・ブランチ

ダンシングは常にオープンで社交的、フレンドリーで

先日発表された RSCDS エチケット・ガイド（東京ブランチレターNo.124, p.3）を読んで、私は衝撃と悲しみを覚えた。「ノーと言うのは問題ない」という見出しの段落に書かれていることは真実であるはずがないと確信している。ある人のダンスの誘いを断った後に別の人の誘いを受けることは、決して容認できるものではなく、今後も決して容認されることはないはずだ。

その前の段落で、相手を不快にさせないよう言葉遣いに気を付けるべきだと（正しく）述べられているにもかかわらず、それと矛盾している。行動や言葉はともかく、拒絶された後に他者を受諾することは、相手を不快にさせたり、動揺させたり、恥をかかせたりする可能性が高くなる。

50 年にわたるダンスと指導の経験から、私はこれらのガイドラインがどのようにして合意されたのか疑問に思う。個人の権利が、大多数の権利よりも優先されている度合いが、不快なほどに高くなっている。特定の人とダンスを踊らないという選択肢を与える、などということは、断じて正しいはずがない。

スコティッシュ・カントリー・ダンシングは常にオープンで社交的、フレンドリーで歓迎の精神に満ちたものであった。このガイドラインは、その真逆を正当化しているように見える。

私のクラブで 3 人のメンバーが実際にこれをやってみたのだが、大きなショックを受けた。初心者から経験豊富なダンサーまで、この行為は正しくないと感じた。

私は、このガイドラインを再考し、改訂することを強く求める。そうすることで、私たちは礼儀正しく、すべての人を受け入れ、歓迎し、すべてのダンサーの気持ちを思いやることができる。

フィオナ・ブリバント、ニュージーランド・ブランチ

追　悼　(p.30)

追悼文はブランチあるいはクラブのセクレタリを通して 150 語以内で送っていただきたい。

ベティ・リー・バーンズ（Betty Lee Barnes）

エリザベス（ベティ・リー）バーンズは米国南東部において力あるティーチャーであった。彼女はワシントン D.C.の全米芸術基金に勤めていた。1964 年にダンシングを始め、指導や創作をした。また、夫のデュアード（Duard）とともにミュージシャンを招聘し、パーティを主催した。それはダンス・スクールが出現する以前のことである。アトランタ・ブランチのメンバーのサポートを受け、1980 年 7 月、Thistle School （シスル・スクール）がノース・カロライナ州、バナー・エルクのリーズ・マクレエ・カレッジで開催された。1982 年には試験クラスがスタートした。ベティはボビー・ブラウンをカナダから招聘し、音楽と指導を依頼した。2000 年、RSCDS の功労賞を受賞。彼女はシスル・スクールを 39 年間、情熱を持って維持し、コミュニティを育成した。彼女は多くの人々に友情に溢れる親身な姿勢で接し喜びをもたらした。ベティ・リーの精神はブルー・リッジ・スコティッシュ・ダンス・スクールに受け継がれている。

メアリー・マコーネル、カロライナズ・ブランチ

ルース・バーンズ（Ruth Barnes）、 ベルファスト

深い悲しみと耐えがたい心でベルファスト・ブランチは私たちの愛する仲間、ルースの死を悼む。ルースは 1957 年に踊り始め、1958 年にベルファスト・ブランチに入った。そこで彼女は将来の夫であるロニーと出会った。1967 年 2 人は公認ティーチャーとなり、ルースは初心者クラスを教え始めた。それは後にキャッスルレイ（Castlereagh）クラスとなり、45 年間続いた。ルースはベルファスト・ブランチのチェアマンとなり、ご主人と共にブランチ賞を受賞した。優秀なダンス創作者であり、またセント・アンドルーズやベルファストのデモンストレーション・チームのメンバーであった。優しく繊細にクラスの気持ちを察するティーチャーであった。長い間、勇敢に闘病生活を送った。最後までクラスを大切にし、亡くなる 2 週間前まで出席した。ルースを知る者

はみな豊かな贈り物を彼女から与えられたと感じている。家族、ダンサー、友人はルースを失い、深い悲しみに包まれている。

ジョン・キャンベル、ベルファスト・ブランチ

マルカム・ブラウン（Malcolm Brown）、ヨーク＆ノース・ハンバーサイド

マルカムの逝去は地元だけでなく世界に深い悲しみをもたらした。1975 年、マルカムはヨーク＆ノース・ハンバーサイド・ブランチの共同創設者となった。彼はブランチの仕事に全身全霊を傾けるとともに、本国（英国）や国外でチューターとして活躍した。チューター、またティーチャーとして国際的に（特にロシアにおいて）有名になり、その功績によって 2010 年に功労賞を受賞した。マルカムは RSCDS の役員会のメンバーであり、また、2016 年から 2019 年まで教育訓練委員会の委員長として CT1 として知られているプログラムを導入した。SCD に対する情熱、おおらかな心で誰をも歓迎する姿勢、セント・アンドルーズのサマースクールにおける初期の映像、創作ダンスの数々、彼が指導したティーチャー、そして何より彼が育てた 3 世代の SCD ティーチャーという遺産によって、マルカムは人々の心に深く残ることであろう。

ヘレン・ラッセル、ヨーク＆ノース・ハンバーサイド・ブランチ

ジョイス・ディドンズ　(Joyce Deddens)

ジョイス・ディドンズは、ビッキー・グドゥロウのレキシントン・デモチームのダンスを見て、自分も SCD を習いたいと思った。ジョイスの依頼でビッキーは毎週ルイビルまで指導に通うようになった。ビッキーが通うのが困難になった結果、ジョイスはクラスを引き継ぎ、ルイビルで最初の公認ティーチャーとなった。彼女はルイビル・ブランチの創立の中心的役割を果たし、何年にも亘ってブランチを牽引するするティーチャーであった。ルイビル・デモチームを作り率いた他、ケンタッキー・スコティッシュ・ウィークエンドやグラスゴー・ハイランドゲームズ（ケンタッキー州にも人口 1.2 万人のグラスゴーあり）を主催し、ボールを開催した。受験生のクラスを手伝い、ワークショップを行った。このようにジョイスはブランチの成功に貢献した。退職後、ジョイスは息子のブレンダンと共にバージニア州のブルックニールに引っ越した。ブレンダンの死後、ジョイスは娘ジェニファーのいるグアテマラに移住した。ジョイスが旅立ってから、彼女を知っている者は寂しい思いをずっと共有している。

ナンシー・ローガン、セントラル・ケンタッキー・ブランチ

クリスティン・ホール (Christine Hall)

モールバン・ブランチは、クリスティン・ホールが短い闘病の後に逝去したことを悲しみの中で報告しなければならない。彼女は 40 年にわたって私たちの最も大切なメンバーの一人であった。初心者クラスにおける彼女の忍耐強さは皆の知るところであった。そして SCD に対する豊かな知識と情熱で多くの夜のセッションを担当してくれた。また、ウースター・グループを何年かにわたって運営し、過去 7 年間はポウィックの毎月の土曜日の午後のダンス会を主催していた。多くのダンサーは、彼女が娘のアナと一緒に他のミドランド・グループのダンス会を訪れていたことを覚えているだろう。クリスティンは有能で知識の豊富なダンサーで、喜びを持って多くの人々とその情熱を分かち合っていた。

スー・サドラー、モールバン・ブランチ（Malvern RSCDS）会長

五十嵐成子 (Shigeko Igrashi)

日本で初めて設立された東京ブランチ創立時からのメンバーであった。1992 年にセント・アンドルーズでティーチャー資格を取得し、2 度も韓国に招かれて指導した。2004-2006 年にはチェアとしてブランチの 20 周年記念行事を主宰。チューターならびに試験主催者として多くのティーチャーを育て、2010 年にソサエティ功労賞を受賞した。東京の赤羽 SCDC で 35 年以上指導し、常に基礎ステップの重要性を指摘し続けた。彼女の力強いステップは私たちの目に焼き付いている。毎年 11 月に行われたダンス会には、彼女を慕って常に 100 人以上のダンサーが参加した。ご冥福を祈る。

小杉由美子　東京ブランチ

マリー・マクレナン (Marie McLennan)

マリーがブランチ内ですべてのレベルと年齢のグループに教え始めてから 60 年を祝った。機会を見つければブランチ外でもクラスをスタートした。どのクラスも小さくても熱心なグループであった。ティーチャー評議会のチェアとして繰り返し何回も役員会の任期を務めた。デモ・チームを設立維持指導し、地域のイベントやフェスティバルに参加した。地域社会に文化貢献したことによってオンタリオ州政府から功労賞を授与された。1997 年には、マリーは当時すでに亡くなられていた夫でティーチャーのビルと共にソサエティの功労賞を受賞した。2011 年にはブランチ賞を受賞。ブランチの催しに惜しみなく貢献したこと、新しいティーチャー育成のためにメンターを務めたこと、ワークショップやウィークエンドのイベントに多くのダンサーが参加するように奨励したことなど、すべてはマリーがこの地域のスコティッシュ・カントリー・ダンシングのために種子をまいた遺産である。

ジャネット・シュライバー、RSCDS ロンドン、カナダ

エルサ・ミアクル (Elsa Mearkle)

1922 年、モントローズで生まれたエルサ・ミアクルはアバディーンで育ち、アバディーン大学医学部を卒業した。病院、そして一般医療に従事した後、英空軍の医療部隊に入隊した。シンガポールに派遣され、そこで空軍軍医ジョン・マッケイブと出会い結婚した。軍を退いた後、英国に戻り、3 年間ロンドンで勉強、そして仕事に就いた。その後、南アフリカへと旅立った。そこで何年も過ごした。エルサは公立病院で働いた。2 人の息子に恵まれたが、残念なことにジョンは早くに亡くなった。エルザは、南部アフリカでハンセン病ミッションに参加し、治療分野を率いるようになった。研究のためにバトン・ルージュ（米ルイジアナ州）近くのカービル病院に行った際に、ヒュー・ミアクルに出会い再婚、ツイン・フォールズ（米アイダホ州）に落ち着いた。SCD のティーチャー、そしてダンシング競技会審査員としてエルサはどこに住んでいても踊りを続けた。

ピーター・マクラウド、ケープタウン

イサベル・スミス (Isabelle Smith)

スコティッシュ・カントリー・ダンサーとミュージシャンは、イサベル・スミスの逝去を聞いて深い悲しみの中にいる。1990 年に公認ティーチャーとなったイサベルは、ニューヨーク地域において音楽やダンシングのイベントを精力的に企画した。

ダンス指導だけでなく、SCD の音楽の演奏を広めることに努力した。そして「キャメロン・ミュージック・アンサンブル」を作り、経験とは関係なく音楽に興味ある人々を広く集めた。そしてキャメロン・ワークショップの恩恵を受けた多くのミュージシャンやダンサーの賛辞を受けた。有名なフィドル奏者であるエルカ・ベイカーは次のように書いている。「音楽ワークショップ、ダンスクラスにおける生演奏、ダンスや音楽のパフォーマンス、ステップ・ダンス・クラス、と、スコティッシュ・ダンスと音楽を広めるため、愉快で斬新なアイデアを次々考えていたイサベルは、疲れを知らない主唱者であり、実行家、原動力だった。そのためには若干波紋を起こすこともいとわなかった。」

クリス・ロナルド、ニューヨーク・ブランチ元会長

ダンサーズ・ダイアリー (p.31)

イアン・ブロックバンクがダンス行事ダイアリーを編集。内容は原文参照。

Scottish Country Dancer 日本語版
第 39 号
2024 年 12 月発行
RSCDS 東京ブランチ
セクレタリ　西森典子
285-0816 佐倉市藤治台 9-6
Tel 043-485-2528
e-mail: bon_accord417@amail.plala.or.jp